

4F学内

芸祭

1970

東京芸術大学
芸術祭



このような時に、四年間大学生でいるという事は、私達それぞれの人生に、何を意味し、どんな位置づけをするのだろうか？——四年間とは、この時代において何と長い時なのか！

一瞬をもて遊ぶ自由はいたるところにちらばっている。明日の死を、頭の片すみにも宿さない幸せな人達。愛の語らいにマリワナの恍惚さより我を忘れた人達。今日という渋滞した一方通行の道路を、前との車間距離さえ保たず、後ろからは絶えず警笛で追いたてられながら、本人はアクセルをいっぱい踏んで、すさまじい音を立てながら、わき見もせず、そのくせのろのろと行く善良なる人達。

このすばらしき時代は私達にとって何なのだろう？この大学生活！隔絶されたこの社会で私達は何をなそうとしているのか？ 私達は虚構のしかも氷の彫像を作ろうとしているのか？

マジックミラーの上の美しいヴィーナスに恋をよせた伯爵が、夢うつつに、その形のいい乳房を抱擁し、唇に愛撫を重ね、その虚な感触の錯覚に我を忘れて没頭している。そして、よだれをたらしたガキどもの前で得意げに「愛とはこんなものだ！」と、とくとくと説くのである。あまりの目新しさに興味をそそられたガキどもは、手をたたいて賛同するのだ。この幸せな伯爵と哀れなガキどもに一杯の酒を進ぜようではないか！

芸術祭には氷の彫像が現われるであろうか？ それとも自己の思考に埋没した男の一人言を聞くであろうか？ 芸術祭は今年もこのような姿で今ここに置かれた。

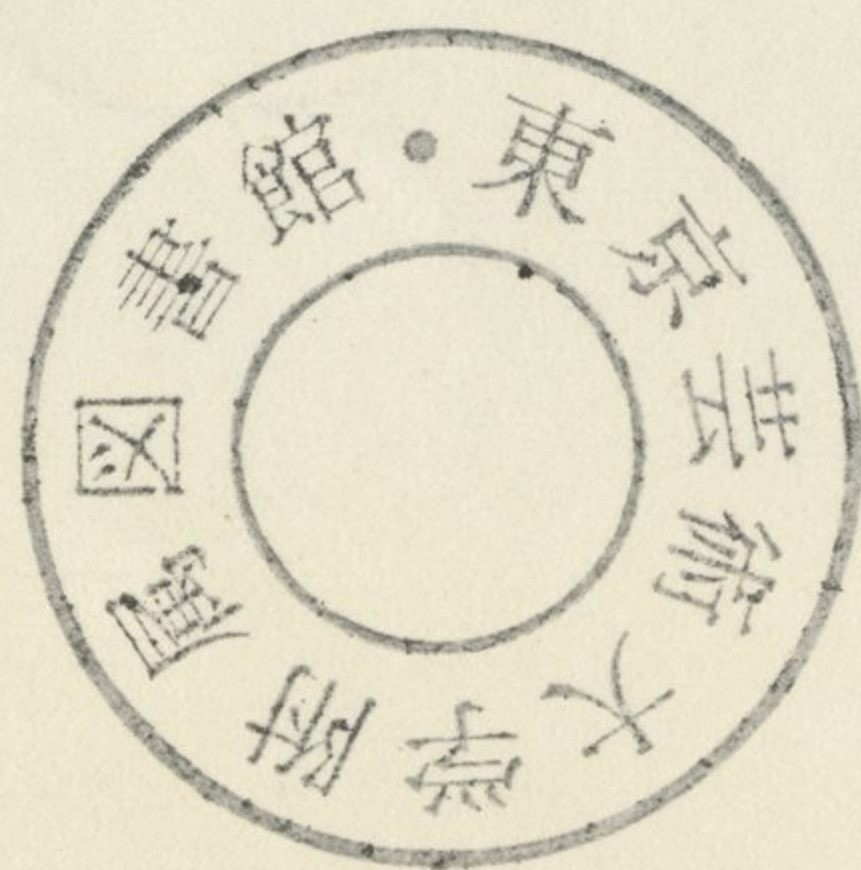
あなたの中の問題でたまたま遭遇した一つの場面ではない。すぐ過ぎ去るであろう……………。

TOKYO UNIVERSITY OF ARTS, ART FAIR

東京芸術大学芸術祭



1970/9/26=29



《芸術祭に期待する》

美術学部長 摩寿意善郎

■東京芸術大学の芸術祭は、学生諸君の自主的な行事として、開学以来すでに20何回か続けられてきた。その間には、仮装の衣裳に火が燃えうつるという傷ましい惨事が起ったり、昨年のように「芸大の解体」を叫ぶ学内外の一群の人々による騒々しい事態もあった。また一方には、単なるお祭り騒ぎであっていいのかという批判もあり、今年の芸術祭の開否については、企画委員の間でも色々と論じられたと聞いている。

それが開催の運びに至ったことは、うれしい。もともと私は、芸術祭の期間が少し長すぎはしまいかと思いつながらも、学生諸君の自主的な行事としての意義については、かなり高く評価していた者の一人である。君たちの先輩が積み重ねてきた伝統をふまえながら、年々この上野の杜に学び集う新進が、新しい芸術創造の意欲をそこに燃やしてくれるという意味からである。

いま美術学部の本館は改築のため壊されかけている。去る7月に「本館にさよならする会」が5千人余の全卒業生に呼びかけて開かれたとき、君たちの先輩が千人余も集まり、和気藹々たる雰囲気の中で、本館玄関の解体に反対する声が切実に叫ばれた。これに対して剽軽に「ナンセンス」と揶揄する若い卒業生もいたが、これは必らずしも老若の断絶ではなく、むしろ全卒業生集会を学生集会なみに演じたユーモラスな微笑ましい一幕であった。その後はみんな、あの由緒ある玄関に惜別の情をこめて去りがてに解散して行った。それぞれ美校・芸大に育ち、芸術に生きる共通の意識に結ばれているからであろうと、この学園の卒業生ではない私には、たまらなく羨しく思えた。本館の玄関は何らかの方法で部分的にも保存を図らねばなるまいと思っているが、来年の芸術祭のときには、もう今のままの姿では見られまい。

従って今年の芸術祭は、君たちにとっても「本館にさよならする会」である。美校から芸大に受けつがれてきた古き学び舎も、70年代を迎えて、まず建物が変貌し、諸制度も改革されることであろう。激動する時代であるから、社会も変って行くことであろうし、君たちの芸術活動もそれと無縁ではあり得まい。そういう時点で開かれる今年の芸術祭では、君たちの一応の芸術的成果を世に問うとともに、あの本館の玄関のあたりや、椎の木の周辺や模擬店などで、教室では持ち得ない学生・先輩・教官たちの静かな対話の場を作り、これからの芸術創造を支えるべき美意識とは何か、といった芸術上の諸々の問題について、心ゆくまで語り合ってほしいと願っている。そこにこそ、わが芸大の芸術祭の意義があるのではないだろうか。



《芸術祭に寄せて》

音楽学部長 池内友次郎



■芸術祭がまたやって来た。

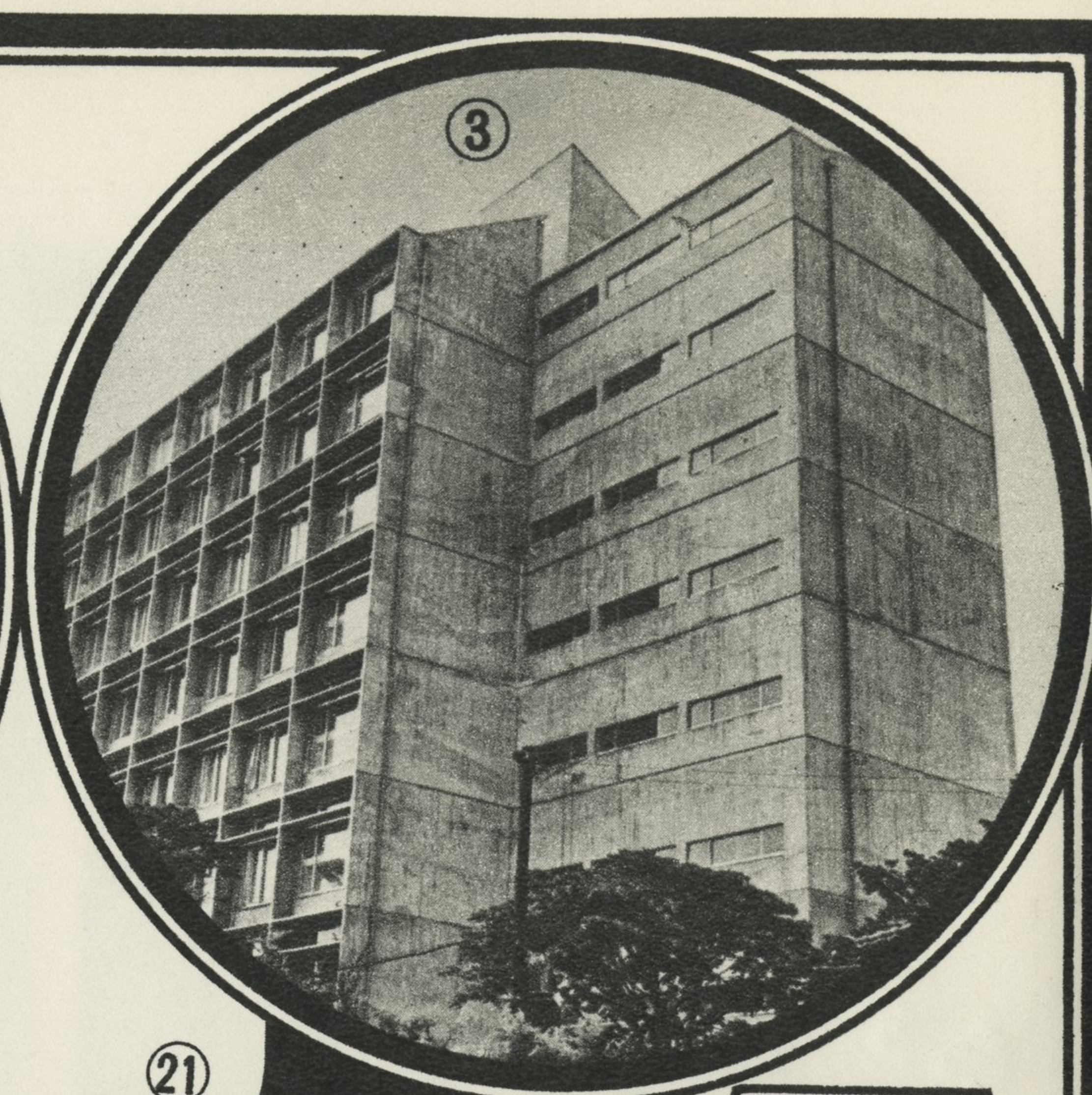
芸大で芸術祭というものを催すようになってからもう何年になるのか……、一年がまたたくまに過ぎてしまった。という感じで、芸術祭は、何回もやって来て、去って行ったのである。

それで、私としては、今回またやって来た今年の芸術祭に特に感慨があるはずがない。「芸術」がどうの、この、「祭」がどうの、というようなことなど、私には、今のところ、それらを対象にするだけの元気がない。

学生諸君が、芸術祭というものを通して、それぞれの若い時代を十分に有意義に楽しんでくれれば、と念願するばかりである。

芸大が新制大学になった最初の年の芸術祭のとき、今もなお残っている音校の玄関、その玄関の前で、学生諸君と焚火をしたことを思い出す。その学生諸君は旧制と新制が混合していた。現在四十才前後になっていて第一線で活躍している音楽家の若い顔が記憶に新鮮である。そして焚火の火が昏れてしまった夜空に美しかった……今、学生諸君が、芸術祭を楽しんでくれれば、と言ったら、私がまだ比較的若かったときの芸術祭のその夜の情景がふとよみがえってきた。

蛇足として附記させてもらっておく。



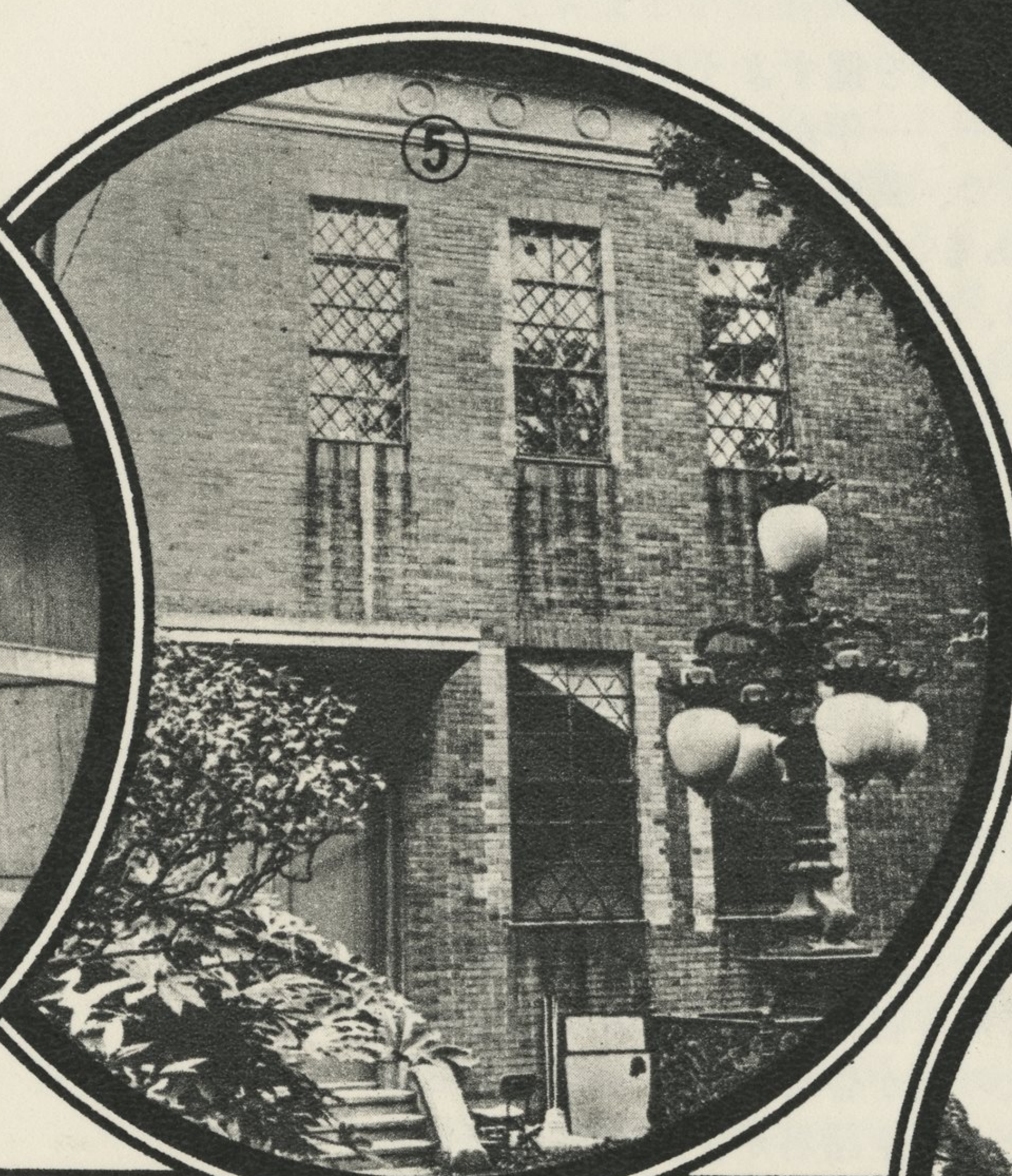
美
校
案
内
之
図

10

21

8

6



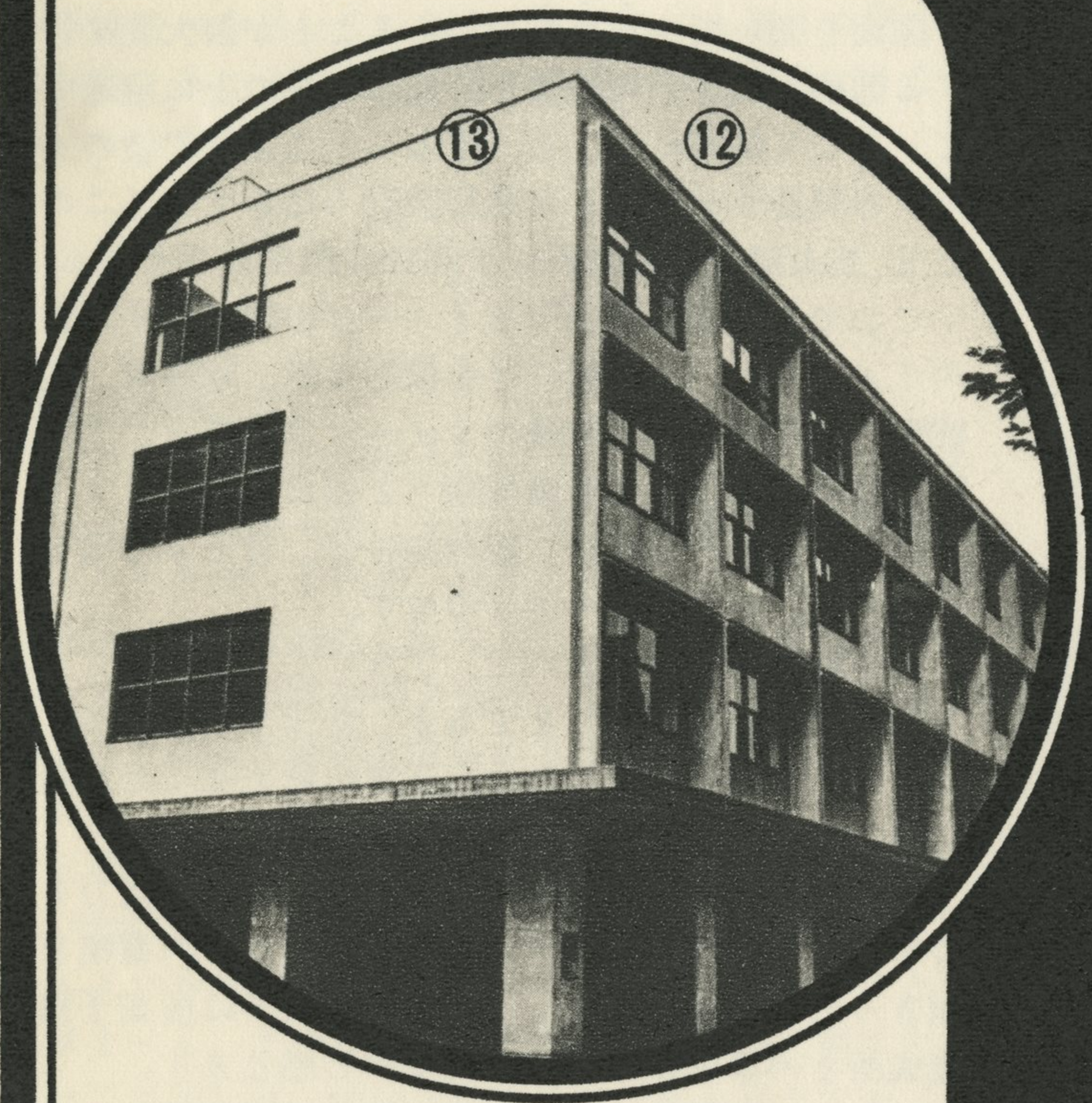
- ①美術学部新館＝工芸科・写真部展示
- ②美術学部本館＝美学連・生協展示
- ③新館絵画棟＝油・日本画科展示
- ④附属図書館
- ⑤陳列館＝保存修理技術展示
執行部「学生運動特集写真展」
- ⑥野外ステージ＝各種催し物
- ⑦受付

- ⑧模擬店
葵＝邦楽科
はたて＝剣道部
みかげや彫兵衛＝彫刻科
らんどり＝小林寺拳法部
劇団ふうふうの店
- ⑨模擬店
野だて＝茶道部

- 観空＝空手道部
- スキー部モギ店
- 映子＝実験映画部
- そば処＝日本画科
- キングコング＝工芸科
- 油絵科1年の店
- 葵姉妹店＝邦楽科
- べったんこ＝建築科

- 模擬店⑩
ドロン＝工芸科
なん八＝軟式テニス部
奇羅星＝V・D3
- ゲイバー＝芸術学科
- 赤頭布ちゃん＝秘
- 模擬店⑪
ゲンモ＝声楽科

音校・案内之図



①⑥

①①

①⑧

①②音楽学部新館第1ホール
演奏会・作品発表会＝音楽学部各科
①③音楽学部新館第2ホール
映画・講演
①④音楽学部奏楽堂
演奏会・作品発表会＝音楽学部各科
①⑤音楽学部教室
楽理科展示

①⑥模擬店
マントバーニ＝器楽科
VIVO＝打楽器科
がっくり亭＝楽理科
はまやき＝ピアノ科
パム＝サッカー部
工芸バザール
①⑦彫刻科展示

受付①⑧
救護室①⑨
芸術祭本部②⑩

模擬店②⑪
アリス＝VD3
くろつつあ＝山岳部

■油画科

多少の差はあれ造形美術家志望としての目的意識を持ち油画科に席を置く我々にも新しいアトリエが完成し、今年の4月以来使用して来た。新しいアトリエと共に新なる教室制度としての出発をしてみて、昨年以來言われて来たことではあるが、現代のように物質文明に恵まれ、複雑化し、情報化された社会に順応できずに残されている美術教育のあり方や現代の教育全般にも通じるであろうその本質的な姿はますます形勢化しつつあるような気がしてならない。仏国の美術大学に於ける美術教育のあり方から伊国の何々形式のあり方等々を研究してみたり取り入れた新しいと称する何々制度へと変えてみたところで学生や教授そのものの本来の自覚している価値意識がこの新しい教室制度への転換のようにすぐさま拡大されたりできようはずもない。学生や教授の各自がつちかわれて来た時代精神や文化の中で現代文化—総合芸術—の動向を正確に把握しそれぞれの立場で自分の占める位置を繰り返えし明確にしていくことこそ先決ではあるまいか…。

■楽理科

各科紹介ということであるから、私は楽理科を、一つの科を構成するさまざまな要素を考慮に入れて紹介しようと思うのだが、これはそう簡単なことではない。楽理科とは「音楽」というものを美学とか史学、あるいは実証比較学なんぞという道具立てによって研究しようという科である。が、しかしこれをやる人間も居れば、アンチも、これが出来ない人間もいっぱい居るのが楽理科なのである。まあ、それぞれの人間がしたいように出来ることをやっている、あるいはやっていないのが楽理科だということになる。今日、全員一体となって何かを志向するなんて言うのは宗教団体くらいのもので、その意味では極めて普通に健全な集まりではないだろうか。

こういうわけで、別になにも隠すこともないが、と言ってとりたてて話すこともないからこのへんで終わろうと思う。

■器楽科

器楽科の連中といえば、ピアノ・オルガン・弦楽器・管楽器・打楽器などをあやつる我々のことであります。我々は自分の楽器をあたかも恋人のごとくすばらしく、かけがえのないものに思い、またある時は、何か魔力を持った、自分の力ではどうすることもできない得体の知れないものに思うのです。しかしその楽器と共に一生音楽の道を歩みたいと決意した者でありま

す。暑い夏の日々を、芸大の小さな練習室で汗を流しながら練習している学生の姿は、さわやかで美しい一面、何か狂気じみた厳しさを感じさせます。それは我々がすべてを忘れて、そこに青春の命をかけているからなのです。その我々にとっての一つの生きがいは、演奏会をもつことにあります。人の前で演奏する時の気持は、経験した者でなければ味わえない、ちょっとした陶酔であり緊張であります。そこにおいて、はじめて自分達の作り出した音楽を人々に伝えることができるのですから。

演奏会までのたゆまない努力と精神集中、演奏中の自分、そして演奏を終えた時の満足感と喜び、これらのことが我々をしてこのように芸術の道へとかり立てるのです。といってもこんなにいつも厳しさに追われているわけではありません。豊かな心から豊かな音楽が生まれ、そして愛にあふれる音楽が、世界の人々に愛を与えることができるのですから。我々はそれらを得るために、すこしでも時間があるとキャッスル（音楽学部内にある洋食堂）にたむろして15円のレモン水を飲みながら同志と意見をたたかわし、また練習の時間をさいて(?)はパチンコで指先の感覚と初見の訓練をし、授業をサポートはデートをするのであります。そして時には徹マンにはげみ、アルコールで空気をつけるのです。

さて、このようなすばらしき若者達に一体どこに行けばお目にかかれるのか御存知ですか?? 音楽学部のマントバーニーというステキな店にどうぞ!

■芸術学科

《Monologue》

『芸術学科なんか出て、どうするんだヨ!』——出て何しようなんて考えて入ったんじゃないサ!! ただ好きで好きでしょうがなかったからよ。「芸術」と呼ばれているものが。美術とか、音楽とか、演劇とか。だから、その私の好きなものの何たるかを極めたかったのだ。——とは開き直っていたものの、そろそろ、やっぱりそうばかりは言ってもらえなくなってきた。「出版会社の編集部? 学芸員? 学校の先生?」やだやだ! それでは大学院に居残って更に決定を延ばす? しかし、ここで考えるのだ。芸術において「女」とは何か? 何であったか?

『文化の頂点を極め、形造って来たのは、すべて男性であった。芸術またこれに然り。女は描かれる対象でしかなかった。そうだろう?』

ムム………確かに。確かにオンナは、創造の対象か、そのパトロンでしかなかった。立ち討ちできるのは、^{オドコマサ}「男勝り」であり「女らしさ」では勝負にもならなかった。あくまでも男を念頭に意識してかぶとを脱いでいる事だ。敢張った所で、所詮「女は女」なのかしら? ——否、否、片や自治会の青き狼、片や芸大解

放のガンジーもどき、それと並んで、昔から女傑でも有名なんだ、この芸術学科は。

男どもを見よ。何を造ってきたのか? ——戦争・貧乏・疫病。何を造っているのか? ——芸術と称して! 敢張れ芸術学科の女性方々、ガンバレ芸大の女郎ども! 今こそ決起する時——芸術を形造るのは、男でも、女でもなく、人間であるのだ。真の芸術はそれ由に偉大であり、普遍的なのだ。今まではたまたまそれを男が代弁していたにすぎない。我々芸術学科はそれを実証するために在るのだ。——要するにこうして理屈をこねてばかりいるのが芸術学科であると思われるらしいのヨン。

■建築科

図面を画いて、かたちをつくるのが芸大建築科です。勉強。観念上の映像を、鉛筆で紙の上に定着させて、そして鮮明にし、そうすることによって彼のイメージを発展させることが建築設計の仕事です。(このことで、芸大建築科を表わせる部分は余りありません。)

ここで、発展させるべきイメージが問題です。住宅のイメージは。その裏付けを家庭生活、家族像、生活感覚へと拡散させ、地域のイメージは僕達を、人間集団、都市、都市力生産諸体制へと連れていきます。一ヶ月から半年の課題は、物理的には、考える時間をくれるので、各人は各々迷うのです。

あき時間が結構あるので、アルバイトも盛んです。一日十時間模型づくりをすると、かなり疲れます。そして考えなくなってしまう。丁寧に考えたことが現実には蹴とばされていくのを見ればなお更です。

四年間芸大で技術修業した学生に、プロの能力を期待する勤め先はありません。わずかばかりの蓄積を正面きってふりかざすのも後めたく、大学は産業予備軍養成所との単純には考えられないと感じます。

建築への認識は、人間への認識と不可分であるとしたとき、僕達建築科学生の興味が人間生活や、社会学的都市へ向くことは自然です。が、その追究方法は定かではありません。「僕は、結局、住宅をやろうよ、」生活と密着させて空間を考える意識が一つの手がかりでしょう。現代の意識がこの手がかりをつかむには、一学生十五人という規模が有利に働きます。毎年、一年と四年にあっては、共通の問題を通じて或は、抽象的に各人の感覚を確かめ合いたい、ぶつけたいという動きがあるのです。読書会。コンパ。

■作曲科

《作曲科の不思議その1》

音楽学部一号館の四階の一角にひっそりと人目につかぬ部屋がいくつかある。それらは時に拷問室と化し、我々の健全な肉体を蝕む牢獄でさえあるのだ。人よんで作曲科レッスン室! 我々は毎週何回か総計百以上もの階段を自らの足によって登り疲れ果て息も絶えだえ

にそこへ到達する。それだけでももの凄い体力を要する。しかし階段だけで我々の受難は終わらない。四季を通じて全館暖房になる一室で受難その二が始まる。楽曲分析やら管弦楽法はたたピアノとバイオリンの音色効果、その他X・Y・Z……。もうそれだけで弱い頭が混乱するのは理の当然。だから作曲科の猛者連はあのように独特の風貌をしているのも自然界の必然なのである。さて拷問が終わるといよいよ放免。そこで朦朧としていた頭が俄然さえてくる。部屋を出た途端それは最高度に達する。自由！自由！これ程すばらしい響きがあるだろうか。しかしその瞬間無残にも地獄へ落とされる。語学の時間が我々をまっている。(作曲科は目のとびでる程、必修の語学時間が多いのだ。ハンターイ) こうして我々錯覚科イヤ作曲科の面々は暗黒の日々を送っているのだ。それは人知れぬ夏の日の怪談。きょうもあの四階の片隅から音や声がきこえる……ホラきょうも。

へだ一れも知らないこーこだけーの
はっなっしー。

■指揮科

現在、指揮科学生四名(大学院一人含む)、そしてその先生方四名から成っている指揮科は非常に少編成ではありますが、それが、反映して生徒と先生方の接触は緊密、且つ音楽的にはもちろん人間的な育成まで諸先生方の熱心な御指導を受け、生徒として、これほど恵まれた環境で勉学出来るのも他に例がないかもしれません。

又指揮者というものは音楽のみならず、人格的にも(心理学的なものも当然含めて)完全でなければ、オーケストラ等の大ぜいの人々の心を統率してゆくことは出来ません。そのため指揮在学期間四年間(別に大学院は二年間)は、短いという声も一部ありますが、これは大学の組織上致し方なく、またそれは言い換えれば「四年間でこれだけ多くのことを学び取り得る科も少ない」と言うことが出来るでしょう。

ともあれ、社会的にも人間的にも非常に立派な先生方が多くおられるということが生徒にとっては最も幸福なことなのです。

■声楽科

あ、本日はようこそおいで下さいました。まずどうぞ囲りを見回して下さい。どの人が声楽科の学生か、分りますか。そうです、一番嬉しそうで、大きな声で笑ったり、良く飲み、良く食べているその人達が声楽科の学生であります。だいたい声楽科の人というのは歌曲、オペラ等を勉強する時にどうしても声を出さなくてはなりません。いつも大きな声を出して練習しているから、つい、いつも大きな声でしゃべってしまうのか、それとも元来大きな声を持っていて歌を始める

のか、それについては古今東西、種々様々な議論を呼んでいるのでありますが、えー何しろちょっとばかり声が大きいはかりに(美男美女が揃いすぎたせいかな)目立っているのです。しかし皆、根は純情で花が咲いたと言っては喜びの涙を、散ったと言ってはその無常さに涙するといった具合で、つまりこれぞ真の芸術を志す者の姿で…あっ紙口が足りない。

これから本題に入ろうと思ったのに……ワゴンでは、ごゆっくり

■彫刻科

コンパを彫刻から取ったら何？残る？。一升びんとビールびんしか残らない？。つまりどっかで一週間に一度は、〇〇年とか××年△会でやられているとか。ちっちゃいのは、山猫コンパから、はては天下晴れての大コンパ。マトニー一匹買い込んで、大バーベキュー。汗だくの彫刻全員集合!!。壮大である。まるで雲の上のコンパのよう。マトンのスモッグ公害でのびているやつもいる。歌に踊りあり、またまたゲーゲーあり。とにかくこんなのが日常の仕事。この合間に、ぼくらの存在にとって、空気のような仕事をやっている。いし・つち・きんぞく・ぶらすちっくなどなど、精神的思考と、美的感性と、肉体的作業の調和を計ろうというわけ。このコンパから日常の発表の場としてつまり芸術祭がある。コンパの大祭典、最大にハレンチにはりきるといわけなのです。わかったかの、わんらー。

■邦楽科

皆さんは、外国の百科事典をごらんになったことがありますか？そしてそこに収められた日本の内容をご存知でしょうか？

現在の日本の誤った記述に比べて、多くのページをさいて語られるもの、それは浮世絵であり、雅楽をはじめとする数々の邦楽で、古来の日本の芸術なのです。

ヨノナカワッタ、といって、この貴重な文化遺産を捨て去っていいものなのでしょうか？我々芸大の邦楽科の存在は大きいのです。

ミニスカートにパンタロン、トンボのめがねで、街を歩きまわる現代の若さが、もう過去のものとして敬遠されがちな邦楽に、新しい息吹きを与え、未来にむかって発展するいきいきとした邦楽を育てていけると信じています。

27日、奏楽堂で行こなう演奏会、ぜひ聞きにいらっしやして下さい。そして改めてわれわれの意図と、勉強の成果を理解して下さい。

■日本画

日本画は悩み続けている。その苦しみは進歩しているかどうかは歴史が決めてくれるであろう。明治以後、以前の伝統的観念の日本画に安住する訳にはいかなく

なってきた。余りにも世界が小さくなりすぎ日本の県のように各国は県と等しくなります身近に文化と接する事ができ、我々の五感に働きかけてくれる。異民族の文化の影響をたふんに取り入れてきた日本文化、伝統芸術と称してきた日本画はこれから先影響と矛盾とにますます途惑い悩みくるしまなければならないであろう。日本画の伝統というのはただ顔料の違いだけである。今日の日本画のガダン批評家の人々の多くは月に人が立つ時代なのに天動説的物の考えで、それが今だ新しい日本画のように信じ、又はポーズを取り、ましてその愚説を正しいかのように若い人迄に説いている。日本画の若い世代の人々が、これから先、真の地動説を唱え疎外されても信じ制作していかねばならない。日本画の展示を見て下されば若い画学生が日本画にどのような悩みを持ちくるしみの画面に向かってるかを見る事ができるであろう。悩みが真の日本画の方向に向かっていていると信じたい。そして日本画の新しい伝統を生みだすのも若い我々が造るのである。

■工芸科(別紙)

■保存修理技術研究室(大学院)

「保存修復技術研究室では何をしているのですか？」と殆んどの方がこう質問なさいます。その度に私達は苦笑したりしていたものでしたが、今年の芸術祭では、歴史の浅いこの研究室の小さな成果を少しでも多くの方に見ていただきたく展示をすることになりました。保存修復技術研究室には二つの目的があります。一つは伝統技術の研究であり、もう一つは文化財の保存修理の研究です。

単に古い美に耽溺するだけでなく、又、細かな修理技術だけに陥ることなく、私達の生きているこの現代、そして未来に古い文化財や伝統技術を血の通ったものとしていきたいと思っています。

将来、芸大に文化財の修理病院を造っていききたいというA先生、仏像修理に生涯をかけたいというBさん、日本画の芸術性をたくさんの人に示すために模写をするというCさん、仏像彫刻の技法を現代彫刻に生かしたいというDさん、文献主義の日本美術史から離れて実物になるべくふれてみたいというEさん等々、構成メンバーも各々ニュアンスのちがった目的・意見を持っていますが、それだけ多くの可能性を秘めているといえましょう。今度の展示では学生から先生まで各自の仕事風景や意見、日本画の模写・顔料・修理仏、そして現在修理中である神奈川県常楽寺十二神将像の修理工程、寄木造の解体状態等を展示いたします。御覧になって感想をお聞かせ願えれば幸に在じます。

●第1ホール・奏楽堂演奏会プログラム 〈第1日〉*sat.*

《第1ホール・プログラム》

《奏楽堂・プログラム》

26

TIME
10:00

- 10:00/2つのフルートソナタ/川上哲夫
 - ☞ Fl. 竹脇仁美
- 10:30/作曲作品発表
 - 室内オーケストラの為のディベルティメント/沢田博
 - ☞ 器楽科学生有志

- 10:00/邦楽科合同演奏会
 - 〔八島〕・〔狸々〕
 - 〔青柳〕・〔四季の柳〕・〔三重奏〕/藤井凡大
 - 〔木と石の詩〕/松本雅夫
 - 〔康砧〕・〔さらし〕・〔秋の言葉〕/宮城道雄
 - ☞ 邦楽科学生

11:00

- 11:00/オルガンと弦楽合奏の為の教会ソナタ/モーツァルト
 - ☞ Org. 小糸恵子/Vl.I 古谷みえ子/Vl.II 辻野順子
- 11:10/CANZONA PRIMAの5/ガブリエリ/他数曲
 - ☞ Trp.I 馬場和夫/Trp.II 田中光寿/Hrn. 馬場健一
 - Trb. 杉本龍行/Tuba. 酒井 健
- 11:30/〔雲雀の巣〕/上岡洋一
- 11:40/〔万葉集による箏とソプラノの為の小曲〕/井上明美
 - ☞ 箏・村上真知子/ソプラノ・和田悠紀子
 - 〔さらし幻想曲〕/中能島欣一
 - ☞ 三弦・増淵任一郎/箏・亀山香野

12:00

- 12:30/2つのヴァイオリンとヴィオラの為のセレナード/ゴダーイ
 - ☞ Vl.I 鹿又真知子/Vl.II 杉山みちよ/Vla. 島崎すみ子

- 12:30/4つのヴァイオリンの為の協奏曲/ヴィヴァルディ
 - ☞ Vl.I 大津純子/Vl.II 青野慶子/Vl.III 岡田恵子
 - ☞ Vl.IV 笹川秀子/K.B 今村れい子/Cmb. 岩下久子

1:00

- 1:00/ハイネの詩による〔白鳥の歌〕/シューベルト
 - ☞ バス・バリトン 岸本 力/Pf. 海老裕子
- 1:30/Cinq Piece en Trio/イベール
 - ☞ Ob. 穴戸雄一/Fg. 森 泰一/Cl. 浜崎 通
- 1:50/テンツェット/マルセルプート
 - ☞ Cl. 金 元/Cl. 丹羽美樹/Cl. 磯部周平

- 1:00/2つのヴァイオリンの為の協奏曲/J.S バッハ
 - ☞ Vl.I 渡辺久仁子/Vl.II 小川智子
 - 指揮・小泉和裕/有志オーケストラ
- 1:20/1年生オーケストラ
 - Meistersinger Prelude/R. ヴァーグナー
 - 小組曲/ドビッシー
 - ☞ 指揮・増野和弘

2:00

- 2:00/リーダークライス OP.24/シューマン

- 2:00/ピアノ協奏曲第4番 OP.58/ベートーヴェン

女の愛と生涯 OP.42/シューマン

メゾソプラノ・妻鳥純子/バリトン・今仲幸雄
バリトン・種井静夫/Pf. 長島寛行/Pf. 阿部陽子
Pf. 岡田知子

3:00

●3:00/岩上の牧人/シューベルト

S. 河田容子/Pf. 小川万喜子/Cl. 星野 正

●3:15/Pas de Deux for Bb Clarinet and Percussion
/A. Russell

蒲谷隆行/吉野すみれ

●3:30/2本のクラリネットとピアノの為のConcert Piece
/メンデルスゾーン

Cl.I 星野 正/Cl.II 井上靖夫/Pf. 植田克己

●3:50/フルートとギターの為のソナタ/ヘンデル

2つのリコーダーと通奏低音の為のトリオソナタ/テレマン
ブロックフレーテフルートと通奏低音の為のトリオソナタ
/クヴァンツ/舞曲集「テルプシコーレ」より

Fl. 大竹奏夫/ギター 安生 健/リコーダー 森 泰一

リコーダー・馬場和夫/Cmb. 小糸恵子/Vc. 阿部雅士

リコーダー・小林幸雄/ビオラダガンバ・大塚拝子

リュート・安生 建(順不同)

●4:20/フルートとハープの為のコンチェルト C-dur/モーツァルト

Fl. 山下さとし/Hp. 横井洸子/Pf. 阿部陽子

●4:50/ジプシーの歌/ドヴォルザーク

S. 田中園子/Pf. 井上佳子

●5:15/七重奏曲/ベートーヴェン

3~4年器楽科有志

5:00

6:00

●6:20/VIVO ジャズフルバンド

7:00

●7:00/世界の創造/ダリウス・ミヨー

指揮・古宮英昭

8:00

Pf. 松本 文/指揮・小泉和裕/有志オーケストラ

●2:40/オーボエ協奏曲ハ長調/モーツァルト

Ob. 脇岡宗一/有志オーケストラ

●3:00/オペラ重唱『魔笛』よりパパゲーノとパパゲーナの
二重唱/モーツァルト/他数曲

声楽科4年有志/指揮・小泉和裕/有志オーケストラ

●4:00/コンチェルト/ヴィヴァルディ

Fl. 大橋容子/Ob. 斎藤勇

ソナタ/テレマン

Fg. 加藤洋男/Cmb.

●5:00/ヴァイオリンコンチェルト第3番 G-dur/モーツァルト

VI. 海野義雄/指揮・増野和弘/有志オーケストラ

●5:30/フルート協奏曲第2番/モーツァルト

Fl. 糸井正博/指揮・小泉和裕/2年有志オーケストラ

●6:30/JAZZ・FREEDOM JAZZ DANCE

/他オリジナル曲

乾 裕樹/野村義照/松浦 武

中川晶三/桂 重高/丸田良一/他

《第1ホール・プログラム》

《奏楽堂・プログラム》

TIME
10:00

11:00

12:00

1:00

2:00

- 11:00/〔音楽のささげもの〕より/J.S. バッハ
 ㊦ Fl. 竹脇仁美/Vl. 松岡まり子/Cmb. 松本 文
 ●11:30/ヴァイオリンソナタ第7番 Alexander/ベートーヴェン
 ㊦ Vl. 初鹿野 司/Pf. 宇川真美

- 12:00/Trio-Sonata d-moll/J.S. バッハ
 ㊦ 三浦由美/浦崎道子/岩沢延江
 ●12:20/ユーホニウム三重奏の為の組曲/ライヒャー
 ㊦ ユーホニウム・三浦 徹/配島公二/鈴木政治
 ●12:50/スカラムッシュ/ダリウム・ミヨー
 ㊦ Pf.I 阿部陽子/Pf.II 祢津裕子

- 1:00/冬の旅/シューベルト
 ㊦ 独唱・川村敬一/Pf. 岩下久子

- 2:30/2本のクラリネットとピアノの為の小品第1番
 /メンデルスゾーン
 ㊦ Cl. 浜崎 通/Cl. 芦田修次/Pf. 高橋和江
 ●2:40/クラリネットとピオラとピアノの為のトリオ第7番
 /モーツァルト
 ㊦ Cl. 都筑滋明/Vla. 渡辺 裕/Pf. 安永順子

- 10:00/シンフォニーコンチェルト/J. ハイドン
 ㊦ Vl. 坂井玲子/Ob. 頼岡行子/Vc. 稲生知子
 Fg. 三宅規美/指揮・増野和弘/有志オーケストラ
 ●10:30/ヴァイオリンコンチェルト/水野 勉
 ㊦ Vl. 白井英治/指揮・水野 勉

- 11:00/4つの独奏ヴァイオリンの為の協奏曲/ヴィヴァルディ
 ㊦ Vl. 小堀雅子/Vl. 佐藤弓子/Vl. 辻 美舟
 Vl. 古谷みえ子/有志による弦楽合奏
 ●11:30/城戸 豊ショー
 ㊦ 声楽・木戸 豊/Pf. 重松正大

- 12:00/2台のピアノの為のコンチェルト/モーツァルト
 ㊦ Pf. 牧野照美/Pf. 久保春代/指揮・八杉忠利
 有志オーケストラ
 ●12:30/邦楽科演奏会
 〔古い声曲による合奏曲〕/中能島欣一
 〔秋韻あきのひびき〕/作曲・宮城道雄/作歌・高野辰之
 〔桜狩〕/山田検校
 〔八段の調〕/八橋検校
 長唄〔新曲浦島〕/作曲・五世杵屋勘五郎
 十三世杵屋六左衛門/作詞・坪内逍遙
 ㊦ 邦楽科学生

3:00

●3:00/トリオソナタ C-moll/ヘンデル

Fl.I 谷口佳江/Fl.II 小川みどり/Pf. 田中洋子

●3:20/スケルツォ E-dur/G.P.テレマン

Fl. 大竹泰夫/Vl. 石黒 章/Pf. 板東裕子

●3:40/山の夏の日/ボザ

Fl.I 小川みどり/Fl.II 谷口佳江/Fl.III 杉原麻里

Fl.IV 大竹泰夫

4:00

●4:00/〔美しき水車小屋の娘〕/シューベルト

Ten. 吉田征夫/Pf. 米本京子

5:00

●5:10/湖上の月・春の訪れ・松竹梅/他数曲

尺八クラブ

6:00

●6:15/木管五重奏〔サンフォニーと舞曲〕/J.P.ラモー

Fl. 喜谷良宗/Cl. 井上靖夫/Ob. 草光研二

Hn. 野村俊一/Fg. 境野達男

●6:40/フルート・ビオラ・ハープの為のソナタ/ドビュッシー

Fl. 細川順三/Vla. 石井光子/Hp. 宮田ふたば

7:00

●7:00/五重奏曲/モーツァルト

木管五重奏の為の日本民謡

Fl. 小川みどり/Ob. 渡辺浩二/Cl. 石川正明

Fg. 森 泰一/Hr. 南 浩之/Pf. 田中洋子

●7:40/弦楽四重奏曲〔アメリカ〕Op.96/ドヴォルザーク

Vl.I 白石久子/Vl.II 上阪則子/Vla. 江島幹雄

Vc. 茂木新緑

8:00

9:00

●3:30/ヴァイオリン協奏曲第2番 E-dur/J.S バッハ

Vl. 笹川季子/有志による弦楽合奏・チェンバロ

●3:50/2つのヴァイオリンの為の協奏曲/J.S バッハ

Vl. 青野慶子/Vl. 大津純子

有志による弦楽合奏・チェンバロ

●4:10/チェロ協奏曲/ヴィヴァルディ

Vc. 三谷広樹/有志による弦楽合奏・チェンバロ

●4:30/〔お里悲話〕劇

声楽科学生・原田研一/宮本 修/小川裕三

渡辺幸枝/黒川 緑

●6:00/ヴァイオリン協奏曲 E-dur/J.S バッハ

Vl. 佐藤 寛/有志による弦楽合奏・チェンバロ

●6:30/Canticle NO.3/Lou Harrison

オスティナート P.P/Henny Cowell

他数曲

打楽器科学生全員

●7:30/河童タン・アマンジャクとうり子姫・他/石桁真礼生

コンニャク座

《第1ホール・プログラム》

《奏楽堂・プログラム》

TIME
10:00

- 10:00/ピアノと木管の為の五重奏曲 OP 16
/ベートーヴェン
☞ Ob. 山田睦雄/Cl. 丹羽美樹/Hr. 野瀬 徹
Fg. 吉田 誠/Pf. 藤森美和子
●10:30/木管五重奏/三枝成章
☞ Fl. 谷口佳江/Ob. 志村重貴/Cl. 磯部周平
Hr. 馬場健一/Fg. 金崎 守
●10:45/ハープ協奏曲/ヘンデル
☞ Hp. 横井洸子

11:00

- 11:00/マリンバトリオ/3台のマリンバの為のメルヘン/小川恵子
☞ マリンバ・吉原すみれ/畠山むつ子/荒瀬順子
●11:20/Kernerの詩による12の歌曲/シューマン
☞ B. 古沢 泉/Pf. 中山孝史

12:00

- 12:00/Bainbridge Island Sketches/マッケイ
☞ Fl. 野口博司/Ob. 草光研二/Cl. 都筑滋明
Fg. 大和俊晴/Hr. 石田新司
●12:30/カルテット OP 51 NO.2/ブラームス
☞ Vl.I 小田切美雪/Vl.II 塚原るり子/Vla. 三枝法子
Vc. 吉井朱美

1:00

- 1:00/ 夏山の一夜/ボザ
☞ Fl.I 矢島清子/Fl.II 浦崎道子
Fl.II 三浦由美/Fl.VI 市川美枝子
●1:20/オーボエ・ファゴット・ピアノの為の三重奏曲/プーランク
☞ Ob. 竹尾幸男/Fg. 高橋勝夫/Pf. 隈本浩明
●1:40/オーボエ・クラリネット・ファゴットの為の三重奏曲
/イベール
☞ Ob. 竹尾幸男/Cl. 鈴木良昭/Fg. 高橋勝夫

2:00

- 2:00/ホルントリオ Es-dur/ブラームス
☞ Hr. 池田 章/Pf. 大坪さなみ
●2:30/クリスマス牧歌/ジョリベ
☞ Fl. 市川美恵子/Hp. 執行道子/Fg. 三谷久木子

3:00

- 3:00/トリオ【おとぎ話】/シューマン
☞ Pf. 中山孝史/Vla. 島崎すみ子

- 10:00/〔赤壁賦〕・〔初夏の印象〕/中能島欣一
〔那須野〕・〔ほととぎす〕・〔岡康砧〕
/山田検校
〔平調合奏曲〕/岡康小三郎
☞ 邦楽科学生

- 12:00/作曲・作品交歓
管楽八重奏曲/東京音大・坪能克裕・作品
☞ 指揮・八杉忠利
《2台のマリンバとチューブラベル・ヴィブラフォーンの為の》
神無月の瞑想/東京芸大・八杉忠利・作品
☞ 指揮・坪能克裕
クリエーション NO.2/東京音大・坪能克裕・作品
☞ 指揮・I 八杉忠利/指揮・II 坪能克裕

- 1:00/交響曲第6番〔悲愴〕/チャイコフスキー
☞ 指揮・増野和弘/有志オーケストラ

- 2:00/Motette III/Jesu Meine Freude
/J.S バッハ
☞ 指揮・松本紀久雄/3年カンタータ同好会
●2:30/ヴァイオリンとオーボエの為の協奏曲/J S バッハ

- 合奏協奏曲/ヘンデル
☞ 芸大バロックアンサンブル/指揮・小林道夫

- 3:00/2台のピアノの為のソナタ/モーツァルト
☞ Pf. 前島あや子/Pf. 土屋美子

3:00

●3:00/トリオ【おとぎ話】/シューマン

☞ Pf. 中山考史/Vla. 島崎すみ子

Cl. 井上靖夫

●3:20/ヴァイオリンソナタ/ブラームス

☞ Vl. 深沢由利子/Pf. 奥浦博子

ヴァイオリンソナタ/ドビュッシー

☞ Vl. 白石久子/Pf. 米本哲子

ヴァイオリンソナタ/バルトーク

☞ Vl. 大津純子/Pf. 鶴崎順子

4:00

●4:00/スタバトマーテル/ペルゴレージ

☞ Sop. 牛山きぬ子/Alt. 奥本 智

Org. 酒井多賀志

5:00

●5:00/LES SOIR DE VALFERE/LOVIS DUREY

☞ Fl. 浦崎道子/Ob. 頼岡行子/Cl. 田形俊二

Fg. 三宅規美/Hr. 野村俊一

●5:20/ヴァイオリンとハープの為のファンタジア

/サンサーンス

秋の散歩/トゥルニエ

☞ Vl. 中村明人/Hp. 志村由美子

●5:45/ソナタ h-moll/J.S バッハ

☞ Fl. 細川順三/Pf. 植田克己

ソナタ Es-dur/J.S バッハ

☞ Fl. 野口博司/Pf. 久保春代

ソナタ g-moll/J.S バッハ

☞ Fl. 竹脇仁美/Pf. 松本 文

ソナタ E-dur/J.S バッハ

☞ Fl. 大橋容子/Pf. 青柳いづみ子

●6:35/二台のピアノの為のソナタ/モーツァルト

☞ Pf. 青山夏実/Pf. 吉田真理

7:00

●7:00/プレリュードとフーガ/ショスタコビッチ

他数曲

☞ ギター部

8:00

合奏協奏曲/ヘンデル

☞ 芸大バロックアンサンブル/指揮・小林道夫

●3:00/2台のピアノの為のソナタ/モーツァルト

☞ Pf. 前島あや子/Pf. 土屋美子

●3:20/ヴァイオリンコンチェルト第5番/モーツァルト

☞ Vl. 榎本吉孝/指揮・八杉忠利

有志オーケストラ

●4:00/2年オーケストラ

交響曲 第5番/チャイコフスキー

☞ 指揮・小泉和裕

●5:00/交響曲第7番/ベートーヴェン

☞ 指揮・藤田修作/有志オーケストラ

●6:00/1・2・3・4年吹奏楽

☞ 1・2・3・4年器楽科学生

●7:00/ピアノ協奏曲第1番 d-moll OP 15/ブラームス

☞ Pf. 植田克己/指揮・小泉和裕

有志オーケストラ

《第1ホール・プログラム》

《奏楽堂・プログラム》

TIME
10:00

●10:00/ピアノ五重奏曲〔鱒〕/シューベルト

☞ Pf. 岩田素子/Vl. 田淵/Vc. 赤松

Vla. 尾花清光/Kb. 松本行正

●10:45/カルテット/ボザ

☞ Fl. 市川美枝子/Cl. 蒲谷隆行

Ob. 脇岡宗一/Fg. 三宅規美

11:00

●11:00/カンタータ147番〔イエスを愛する〕

/カンタータ140番〔目覚めよと呼ぶ声あり〕

/他/J.S. バッハ

☞ Tb. 多田輝美/Org. 小糸恵子

●11:20/フルートとハープの為のコンチェルト/モーツァルト

☞ Fl. 山本万理子/Hp. 宮田ふたば/Pf. 牧野照美

12:00

●12:00/弦楽四重奏曲 OP.95〔セリオーン〕

/ベートーヴェン

☞ Vl.I 越智かおる/Vl.II 河瀬江里子

Vla. 田崎伊久子/Vc. 星野裕子

●12:20/カンタータ140番/J.S. バッハ

Vc.I 松本知野子/Vc.II 市村邦夫

☞ 芸大カンタータクラブ/指揮・小林道夫

1:00

●1:00/ピアノ五重奏曲〔鱒〕/シューベルト

☞ Vl. 尾花清光/Vla. 山崎陽子

Vc. 佐藤 光/Kb. 星 秀樹

Pf. 宇川真美

2:00

●2:00/ジプシーの歌/ブラームス

☞ メゾソプラノ・岡本純枝/Pf. 岡田とも子

●10:40/四季/ヴィヴァルディ

☞ Vl. 独奏・上阪則子/指揮・小泉和裕

有志による弦楽合奏及びチェンバロ

●11:40/ブランデンブルグ協奏曲第5番/J.S. バッハ

☞ Fl. 早柏淳二/Cmb. 多田雅江/Vl. 西田 博

●12:00/Concerto a 5 D-dur/テレマン

☞ Fl. 新谷要一/指揮・増野和弘

有志オーケストラ

●12:30/「現代箏の音楽」第2回

☞ 邦楽科3年有志/卒業生・他学部在学生

●2:00/Pastorale de Noel

Piano Sonata

Flute Konzert 第2番

礼拝 組曲

●2:40/4つのホルンの為の組曲/Eugene Bozza
☞ Hr. 南 治之/Hr. 池田 章/Hr. 馬場健一
Hr. 野瀬 徹

3:00 ●3:00/フルート・ヴァイオリン・ビオラの為のセレナード
D-dur/ベートーヴェン
☞ Fl. 野口博司/Vl. 清家一恵
Vla. 渡辺 裕

●3:30/SONATA pour CLARINETT OP.167
/CSAINT~SAENS
☞ Cl. 金 元/Pf. 高橋和江

4:00 ●4:00/トランペット2本のフルート 弦楽四重奏の為の
古典形式による組曲/ダンディ
☞ Fl.I 野口博司/Fl.II 糸井正博
Tp. 海保 泉/Vl.I 福島よし子/Vl.II 新納真理子
Vla. 吉野美恵/Vc. 秋月敏春

●4:30/ピアノトリオ A-moll/ラベル
☞ Pf. 植田克己/Vl. 内田 輝/Vc. 藤沢俊樹

5:00 ●5:00/プレリュートとフーガ/ショスタコビッチ 他数曲
☞ ギター部員

6:00 ●6:30/ピアノトリオ OP.90〔Dumky〕
/ドヴォルザーク
☞ Pf. 安井耕一/Vl. 松岡まり子
Vc. 松本知野子

7:00 ●7:00/エチュード研究発表
☞ コンニャク座

8:00

Douze invention pour douze instruments
/アンドレ・ジョリベ
☞ 音楽学部学生
/アンドレ・ジョリベ氏講演

●5:00/ピアノ協奏曲第1番/ベートーヴェン
☞ Pf. 山下泰夫/指揮・小泉和裕
有志オーケストラ

●6:00/歌劇〔椿姫〕ハイライト
☞ S. 牛山きぬ子/S. 和田悠紀子
T. 若本明志/Br. 森田澄夫
B s. 山口俊彦/指揮・小泉和裕
有志オーケストラ

●11:00-11:30 / たたら再現記録映画「和銅風土記」35mm30分

たたら製鉄は、19世紀後半に生産性を誇る近代製鉄が輸入されて以来、全くその跡を絶ってしまったが、それまでは、わが国で必要とした鉄鋼類のすべてを供給していた。

この映画は最後のたたら師といわれる人々の原料採取から道具づくり、築炉から操業にいたる鉄作りの技術を中心に、その知識がどのようにして、風土の中に生まれ感覚として育ち、伝承されてきたかを求めようとしている。

●11:00-1:00 / 美学連シンポジウム 講師・藤野まゆみ

美学連では、芸術祭に、交流展とシンポジウムを計画しています。

交流展では、全国の美術(系)学生が自分達の作品を通じて、相互の理解と友好を深め、シンポジウムでは、講師を囲んで「現代の世界美術の状況」について皆で考えたいと思います。新しい日本の美術を築かんとする諸君!積極的な参加を期待しています。

●1:00-2:00 / 講演 寺山修司<私にとって芸術とは>



氏は1936年1月10日青森に生まれた。

早稲田大学を中退し、日本ペンクラブ、現代歌人協会、シナリオ作家協会などに所属。

1955年「チェホフ祭」にて短歌研究新人賞受賞

1964年「犬神の女」にて久保田万太郎賞受賞

1964年叙事詩「山姥」にてイタリア賞グランプリ受賞など詩人としての活躍はすばらしい。

又、氏は天井桟敷の主催者としても知られ、前衛演劇の旗手として活躍を続けている。

氏の個性たっぷりの人がらから察すると、氏独特の芸術観が聞かれそうである。

著書 歌集「血と麦」「田園に死す」ほか
評論集「遊撃とその誇り」「戦後詩」ほか
エッセイ集「みんなを怒らせろ」
戯曲集「血は立ったまま眠っている」ほか

●2:00-3:30 / 映画「博奕打ち総長賭博」

博徒の生態と、その断面をリアルに描いたもので、東京江東の博徒、天竜一家の総長跡目相続争いに端を発して、親分子分、兄弟間に対立が生じ、血とドスのドラマが展開、遂に一家が壊滅するまでを追う。

脚本 笠原和夫

監督 山下耕作

出演 鶴田浩二・藤純子

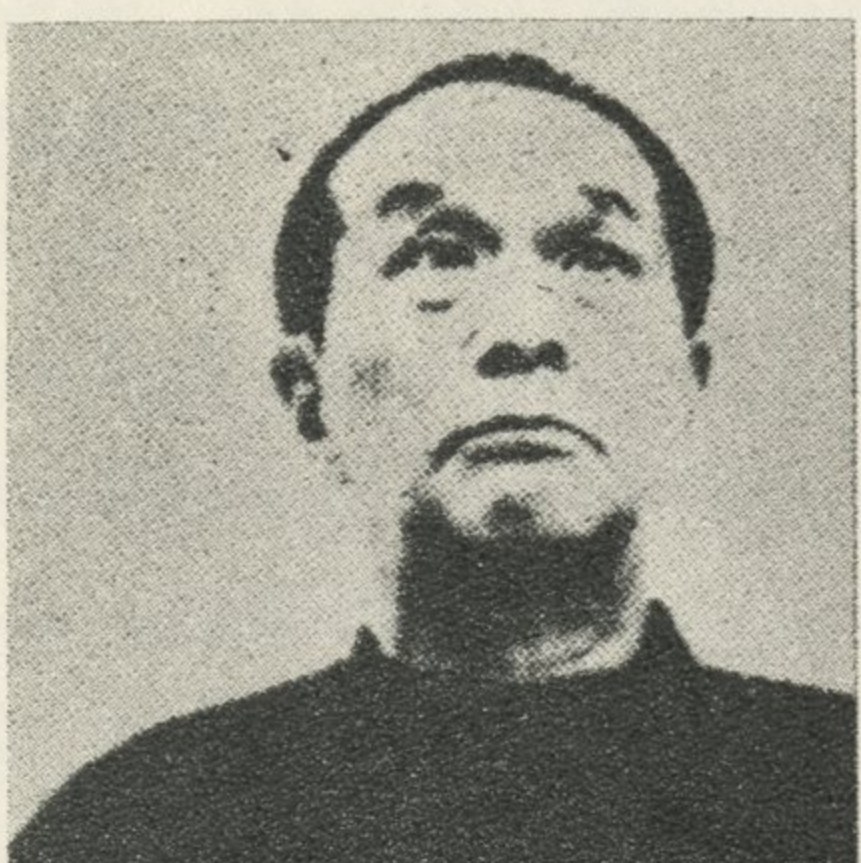
桜町弘子・若山富三郎

昭和43年封切京都カラー作品

●4:00-5:00 / ギター部演奏会

28 *mon.*

●1:00-2:00 / 講演 岡本太郎<私にとって芸術とは>



氏は1911年東京青山に生まれ、現代漫画の始祖岡本一平を父とし、作家の岡本かな子を母とした。

1929年美術学校に入学後まもなく渡欧。

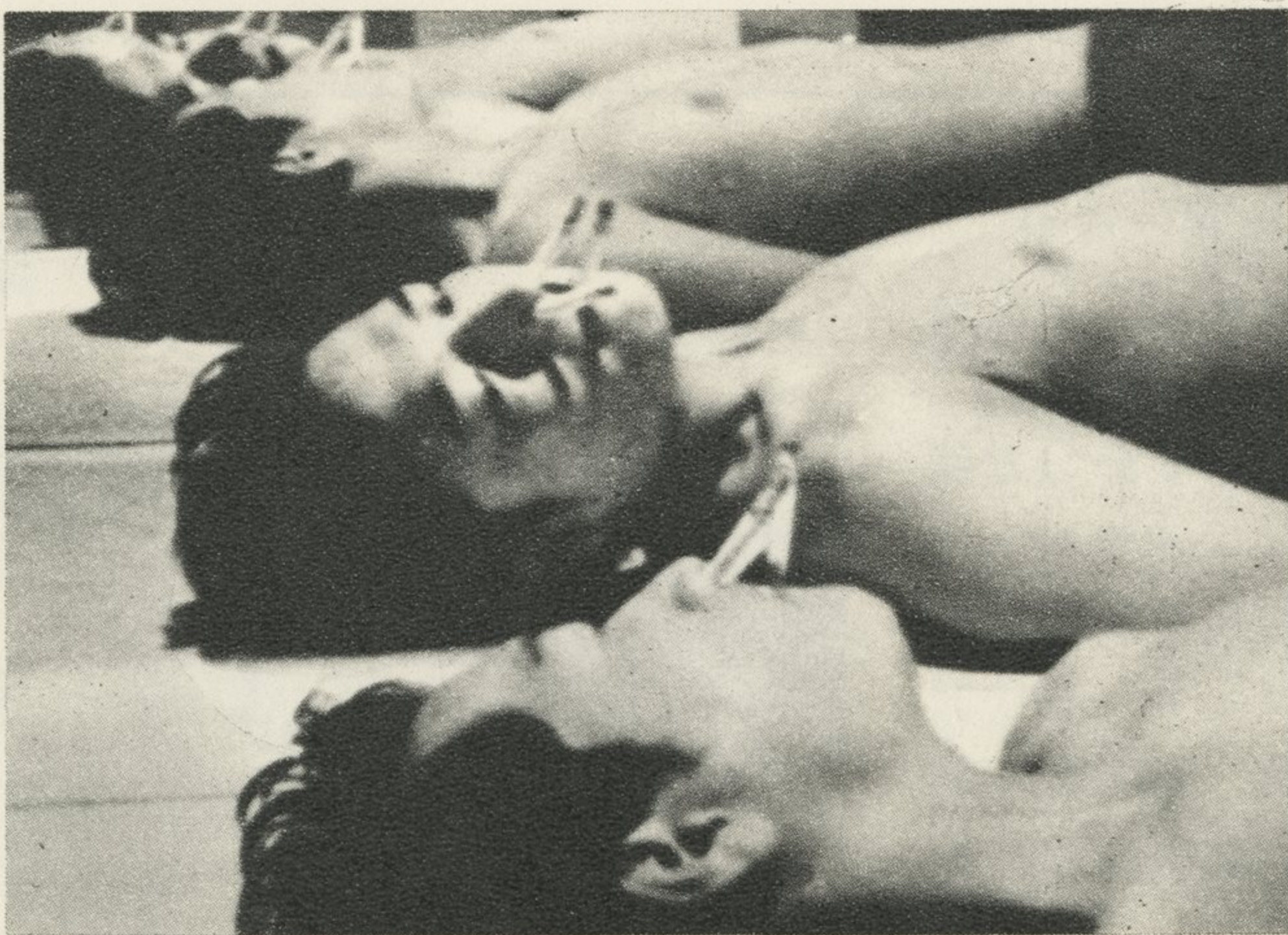
若くしてパリ画壇の第一線で活躍し、抽象派のモンド

リアン、カンデンスキー、アルプ、超現実派のブルトン、エルンストら現代絵画の巨匠たちと親交があった。その間に、ソルボンヌ大学で哲学・社会学・民族学をおさめ、1940年帰国。一兵卒として出征46年復員後、続々問題作を発表。ふたたび渡欧。パリ、ニューヨークで個展。また、ベニス・サンパウロのビエンナーレに出品するなど多彩な活躍を続け、万博のお祭り広場の太陽の塔の作者としては周知の通りである。

常に前向きのアバンギャルド精神を保ち、超現実絵画の制作やユニークな文筆活動を続ける氏の情熱的な人となりを講演においてじかに感じたいと思う。

著書 「芸術と青春」「青春ピカソ」「日本の伝統」「今日の芸術」「私の現代芸術」ほか

●2:00-3:00 / 映画「猶予もしくは影を撫でる男」・「三人でする接吻」(シネマ・ヴォワイアン制作)



「猶予もしくは影を撫でる男」
草月実験映画祭最優秀作品賞受賞
脚本・演出 奥村昭夫
出演 大松誠二・香 好子
小林隆子・金原絹代・浜田敬子

29 *tue.*

●11:00-11:30 / たたら再現記録映画「和銅風土記」

●1:00-2:00 / 映画(未定)



「三人でする接吻」
脚本・演出 奥村昭夫
出演 谷川俊之・金原絹代
前川信也

《発言》

編集委員会では、現在 各界で活躍されている方々に、「祭」への提言・発言——今思うこと・提言——もしくは芸大への批判etc.——に關し、原稿を依頼し、ここに御好意により寄せられたものを掲載します。

多木浩二



70年までの何年かの間、万博というイベントがデザインや映像の領域を占める割合は非常に大きかった。多くの芸術家たちの関心をそそったのは、そこに可能性のひろがるのを多少とも見出していたからである。万博がはじまってから、かれらの多くは官僚とのたたかいに疲労したことを告白し、また官僚制度とデザインとがどのようなあいられないかを語りはじめた。

私はいまさら万博について、批判めいた何かをいおうとしているわけではない。ただ、万博に参加したデザイナーたちの内部で、万博あるいはこれからのデザインについてどのような思想が抱かれているかは興味がある。その一例が栗津潔さんがいうデザイン零年という発想である。それはかれが、いまさらながら近代デザインの終焉を

な支配のイデオロギーを片はしから暴露していくことになるかもしれないのである。

やや抽象的になるが、デザインというのは狭義のこれまでデザインといわれていたものと人間との記号的な共存関係をさしているのだともいえる。したがってさきに主

体といったが、それもまた決して世界を對象化して眺めるひとつの固定しうる視点ではなく、この共存関係によって変化するものでもあるわけである。それは決して独我論を構成するものではないが、かといって世界の出来事に縦属するものでもない。

このようなことをこしばらくのあいだ考えてきたが、それは「デザインとは果して可能か」という絶望的な問いと背中あわせなのだということに気がつく。この絶望的な問いに片よってただ体制にのみこまれ

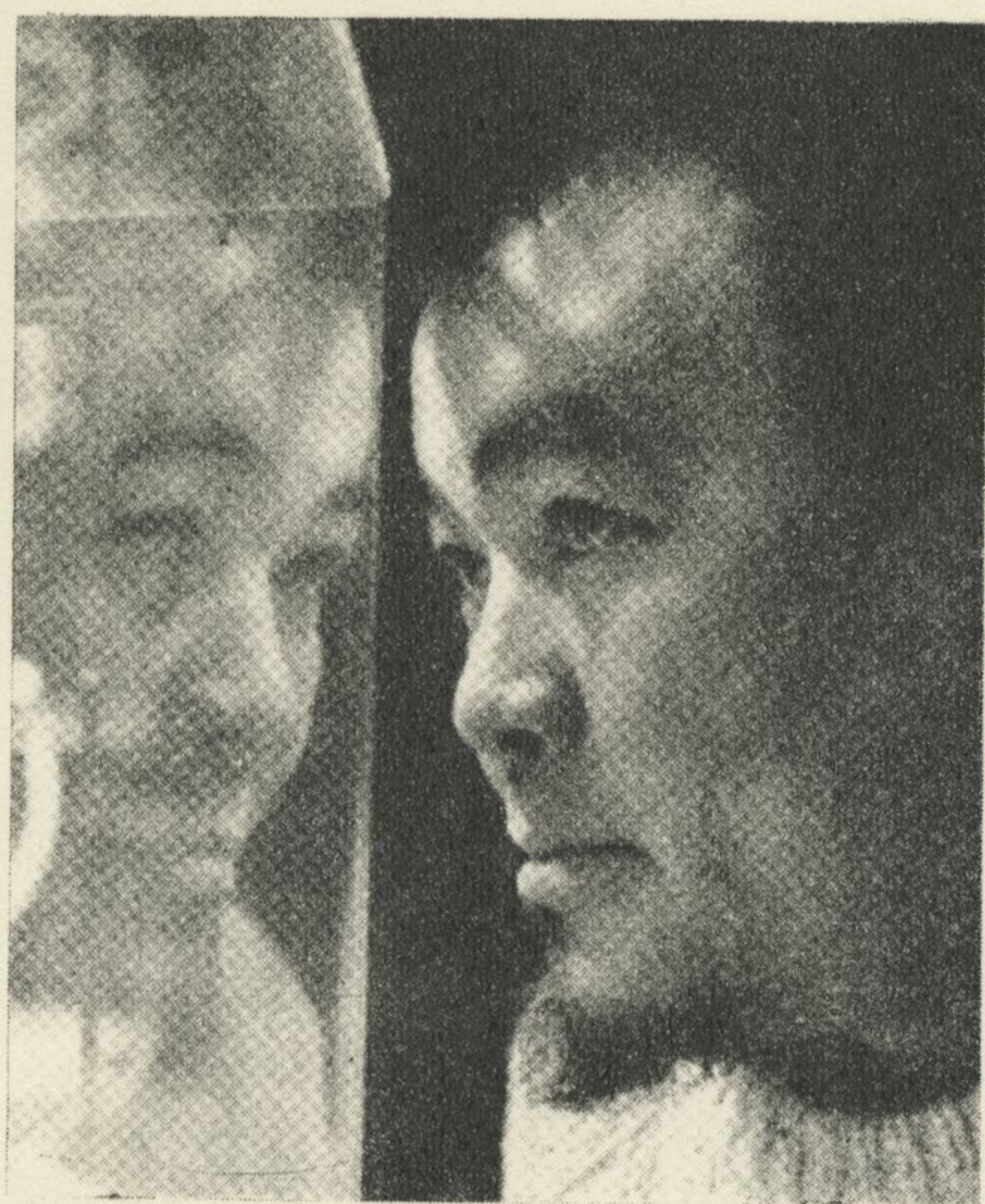
《親密帯》の接合

杉浦康平



ロックを聴く——というより、あの強烈な音量のなかにインヴォルブされるとき、若者は自ら寄りあう。互いの距離をつめ、個人個人の領域に他人を引き寄せること、または通常浸しがたい他人の《親密帯》への無遠慮な踏み込みが、自然に行われる。強い音圧にさらされると、人間の耳はまず、へくすぐられるような感じをもち、次いで《痛み》を感じる。増巾された撥弦音や打撃音が聴覚をその発生の原初である皮膚感覚へと、押しもどすのだ。西独で冬の学期末を迎えたとき、学生達が学校に隣接する学生寮で開いたパーティーに参加したことがある。その日三〇四〇〇人もの人々でうずまった四階までの狭い階段室だけを使い、ベースやピアノ奏者は、動こうとしてぶつかって来る人々をかき分けるように弾きながら、激しい音

吉村益信



僕は芸大に2回うけて2回おちている、1回目は明らかに下手糞であつたので当然2回目は刻苦勉励の末、腕に自信があらうたとき、丁度ドアの手前でデッサンをしていて、折り返し、ドアをノックなしで強引に入ろうとしたゴウマンな試験官をドアごしにはねかえして案の定おちた、そのとき以来か、それ以前からか、僕には在野側の運命がつきまとっている、反体制サイドの色が濃いわけである、しかしいつまでも反体制では居れないのを知つたのは最近である、要するに体制があることが信じられなくなつた、体制などというものはないのである、簡潔な論理ながら問題を相対的に分離してか、る遊びをやめて、一方的に、あえていえば超体制の意志が、ありとあらゆる体制的システムを貫通する、乗っ

取りの意志が現在の僕の方法論である。それは、あるときはホコリを払ってやるだけの簡単な操作で充分かもしれない。ここに、一つ提案がある、世の中には芸術家ではない美術屋があまりにもうよくしていると思わないか、名だたる美術家のほとんどが実は、そうではないが、彼らは大抵、画商、美術アッセン業、批評家・美術館キュレーターの仕事だす商品になつてはいないか。

御承知のように、現在の美術館・画廊にほもはや骨董的システムしか残っていない、当然、我々は美術館・画廊サイズからはみださなくてはならない、つまり美術という、目の上のホコリを払はなくてはならない。我々がやらなくてはならないことが、世の中には一杯あるのである。《造形作家》

石岡瑛子



彼のいうのは広場とは結局、われわれがつくりださねばならないもので、もつと端的に言えば占拠しなければならぬものであるからである。万博のお祭り広場は、結局は官僚的文化の典型のようになってしまつ

ヘデザイナー↓



た。それはあらわれとしては些細な統制上の項目となつてあらわれるが、それらは目に見えぬ巨大な管理の思想に統合されていくのである。これほど人間の自発性とほどとおいものはない。もし祭というものあるとすれば、日常的なものをこえてこの自発的な主体の回復がいけない筈である。磯崎新がお祭り広場の挫折のなかにこのような事態を適確に見定めより本質的に広場というもののありようを考えるための資料とするのはきわめて正当に思えた。むろん、そこからだけは広場の計画法などでてくるわけではない。

結局それはわれわれが参加しなければならぬものであるとすれば、万博が語らなかつた部分にのこしたひとつの手がかりは、デザインとは、制作者と享受者とが分離し

祭について

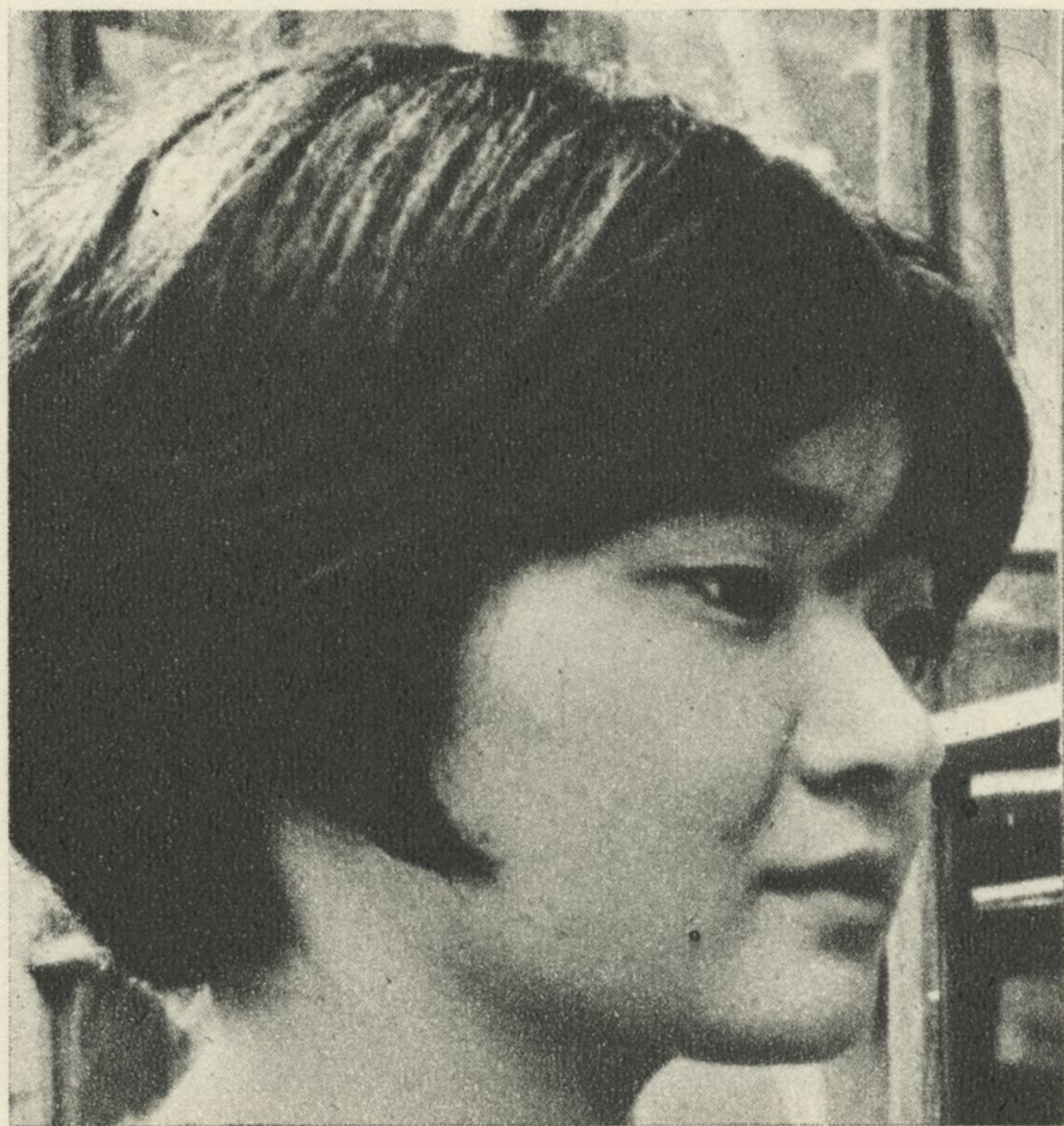
金井美恵子

あわせだねえ。学生運動で殺されるということがないのだから」と私に言つた言葉が彼等の切迫した現在の状況を表わしていた。今回のニューヨーク行きの目的のひとつにニューヨーク近代美術館で6月末から開かれたグラフィックデザインショウに私のポスターが展示されることになったので、キュレーターのジョン・ギャリガン氏に会つて、話を聞くことがあつた。私が美術館を訪れた日、それは美術館が国に対して抗議のストライキをした日であつた。そのシーズン最大のショウとして注目されていたフランク・ステラの作品は片づけられ、そこにケントの学生デモの際の報道写真を展示し、フィルムライブラリーでは戦争に關するフィルムを上映していた。学生達はケントの学生が殺された事件を通して国に

祭について

た。それはあらわれとしては些細な統制上の項目となつてあらわれるが、それらは目に見えぬ巨大な管理の思想に統合されていくのである。これほど人間の自発性とほどとおいものはない。もし祭というものとすれば、日常的なものをこえてこの自発的な主体の回復がいけない筈である。磯崎新がお祭り広場の挫折のなかにこのような事態を適確に見定めより本質的に広場というもののありようを考えるための資料とするのはきわめて正当に思えた。むろん、そこからだけは広場の計画法などでくるわけではない。

金井美恵子



であることを示すものではなく、だれもがデザイナーであるという通俗的でない方を、おそれないでいえば、デザイナーの主体を再びほり起してそこからデザイナーのあらたに構造を見出し、それが集団と物と時間の流れのなかでつくられゆく過程をあらたにとらえなおすことではなかつたらうか。

芸術一般のことはいざしらず、少くとも都市とか建築とかデザインとかいうものは観客というものが必要なのか。だれかがつくり、それをだれかがうけとるだけのシステムから観客の主体への移行が、都市を都市たらしめ建築を建築たらしめる。それは設計者やデザイナーもまたこのような主体的につくる行為に加わらねばならないことを意味している。

だがそれがどのようなにしてできるのか、い

まのわれわれには実はよくわかっていないのである。粟津氏がある新聞に不確定なデザインといったことは、私なりに理解すれば、つくるものとつくられるものとがたえずいれかわりこの小さなシステムがいくつもいくつも重なりあつて文化を構成するにいたるようなデザインとデザイナ―のあり方を示しているのではないかと思つたものである。この状況は、たんに大衆社会状況というだけのことにおわるおそれももつてゐる。あらゆるヒエラルキーが崩れ、砂のようになつたデザイン状況というものもどちらかといへばなにかを拾象してはいまいか。不確定なデザイン——それには賛成だし、このような小さな自発的な爆発が、下層の文化のなかで生じることによって、脱イデオロギー的に見えるが、実はきわめて強力

祭と呼ぶにふさわしい日々はすぎ去った。と書くと、確かに祭の日々が存在していたかのような錯覚にわれとわが身を落し込んでみたい気分だが、祭という黄金伝説の彼方の地平に、やはり死の影がある。死者のまなざしの感じられない祭は無意味だ。祭の情熱と狂気と暴力と恋は、もつとも現実的な夢に属し、すでに夢と現実との区別つかない燃えあがる幸運の時間の後で、わたしたちが生みつづけるのが祭の私生児であるというのは情無い。せめて、わたしが夢見るのは《血祭》だ。なにを血の祭典にまつるか？ わたし自身の出血をもつて？

ともかく、祭が狂気であるならば、それは危険なものと決っている。男はケンカを女は犯されることを覚悟で祭にのぞみたいものである。祭というからには大学祭にあ

つても、ことにあたつて覚悟をする必要がある。あたしには関係ないもの……。

詩人

抗議すべき多くのメッセージを印刷物にして、会場で配っていた。

ギャリガン氏は私と一諸に展示される他の国の作家の作品について、ていねいな説明を加えながら、見せてくれた後、私が展示の決ったポスターにつけた「POWER NOW」というタイトルは今の揺れ動くニューヨークにとつてもフィットするのではないかと言われた。

フランク・ステラがそのストライキのために自分の作品を引き払ったことも含めてホイットニー・ミュージアムでは、ロバート・モリスが、ニクソンのカンボジア攻撃に対する抗議の声明文を書いた紙、一枚の会場に残したきり、全作品を引き払い、他の画廊、美術館におけるアーティストのニクソン政権に対するプロテスト運動は盛ん

で、私は終始圧倒され続けた。

あらゆるジャンルの表現の中に、男女がいっさい何も身につけない自然の姿で現われるのは、現在の不本意な状況へのプロテストがあることをニューヨークにいればすぐ理解できる。若い青年達のセックスに関する考え方は解放などという言葉が全くあてはまらないと思われるほどナチュラルで明快そのもの。ジェネレーションギャップにあえぐ年寄りがそうだった時代の流れについていけず、モタツイているといった感じを受けるくらいである。こうあつた状況の中で芝居・映画・音楽・アート・出版物……は、もし今、それを日本に持ち込んだら、全部真黒に塗りつぶされるか、ずたずたに切られて何も残らないのではないかと思うくらい表現が行われているし、検閲とい

うものはあつてないに等しいという感じであつた。全裸で演じられるシーンはどれも主張のポイントであり、見事な説得力であり、それに共感しない人は、いないのではないかと思われるほどであつた。若い女性達はブラジャーからもガードルからも解放され今までの硬いヨロイのようなドレスに変わって軽いなめらかな皮膚の様な布地が流行し、身体 of 自然なラインをドレスの上から感じられるように見せるのがひとつのファッションになつていた。

今回、会った若いクリエイター達は、いずれも今、最も説得力を持つテーマはポリティカルな問題だと力説していた。丁度公害問題に関するフィルム構成を手がけていた友人は今政治意識を持たない人間に創造行為はありえないとまで言いきつていた。

問 好きな食べ物？

—— お子様ランチ、インスタントラーメン。

問 好きな女優？

—— シャロン・テート。

問 今、行きたい所？

—— アメリカ、アメリカ以外はあまり行きたくない……。アメリカと日本とはは比較的に興味がある。

問 映画の興味は？

—— 今、映画を撮りたいなあ、ということはない、ここはムーヴィーがいいなあ、と思うことはあつても、映画はどうあれ初まって終つちやう……。つまらない、写真の方がアナーキーなんじゃないかな！

問 パズリーニは？

このことは広告表現に関しても同じレベルで語られる。例えば戦争反対を強くうたいあげた広告があつたとする今ではアメリカの全消費者のあるパーセンテージは戦争反対を叫んでいることは事実なので彼等のメンタリテイに訴えるものを創ることで広告効果は約束されるというわけである。

日本にもどつてあい変わらずあたりさわりのない美辞麗句を並べたてている広告を見るにつけても、広告人のパワーが認められる日は遠いなど感ぜざるをえないのである。

△デザイナー△

—— あまり好きじゃない……。フエリーニの方が好き。

問 死の感覚は？

—— 無常感がボクのベースだと……。仏教思想の……。現世にメッタメタにこだわら続けることは、すでにどこかでいつも死を意識していることになるかも……。。

問 神の感覚？

—— オレはフエティッシュで汎神論者だということとは、結局無神論なのかな……。。

問 “連帯”について？

—— “連帯”という言葉のもとで云う限りボクはまるで信じられない……。もし、似た様なことがあるとすれば、それは“連帯”という言葉を使わないと

写真に何ができると云えば、まず絶望的な訳で……。、少しずつ撮っていくうちに、ふつと何かになり得るかな……。。

森山大道



ここにあるのかも知れない。

問 “日本”の直感は？

—— ものすごい嫌悪と、ものすごい愛着。……。つまり、自分が嫌いだけれど、なお自分に執着すること……。。

問 最後の一応、芸大について？

—— ぼくはまったく知らないし、わからない、ただ、芸大というものから、どうしても芸術という言葉で連想してしまう。……。例えば古色蒼然とした先生がいて、芸術職人養成の場という感がするけど……。、ぼくは芸術という意味を知らないし、まず、生理的な嫌悪を覚えてしまう……。。

△写真家△

インタビュー・文責 野沢憲二

△インタビュー 八月十一日△

高松次郎



《祭り》と非祭り》 真鍋博



現代の祭りとは即・脱日常空間のことである。脱日常的であれば簡単に祭りが成立する。

七〇年代は祭りの日常化の時代といえようか。

銀座や新宿の車道の車が止まればそれは人間存在を主張する歩行者天国という真昼の都市の祭りであり、山麓に若者たちがギターをかかえて集ればロックフェスティバルという商品化された青春の祭りなのである。

行為や空間が脱日常的であるだけでなく物が集り、値段が安いだけでもまつりは簡単に成り立つらしい。

デパートの春物一掃大バーゲン、世界の古書祭りから放出宝石の祭りまでいまデパートは“祭りの高層化”を意味するぐらいだ

から、情報時代の今日、物が選択性をもって多種多様に集ればそれが充分祭りの意味をもつ。

祭りは誰かを祭りあげるのだから物品の多種多様どころか、きものまつり、うなぎまつり、スキーまつりに楽器まつり、みかんまつりに靴まつりは消費者を王様として祭りあげるのだ。

企業が自らも自らを祭りあげ、祭りに仕立てるのが光文社のカツバまつりや文春まつりである。

祭りは輸入もされる。

クリスマスは云うにおよばず、パリ祭やバレンタインデー、輸入自動車の外車ショー、アメリカ食品まつりや英国ドッグフェスティバル、各地方都市の銀座をアメリカ直輸入のブラスバンドがバトンガールを先頭に

行進もする。

そして地方の祭りが観光化され、札幌の雪まつり、仙台の七夕まつり、阿波踊りが周遊化し、他所ものばかり集つて祭りが日本の各地で混血化しはじめている。

情報化時代、風あげから斗犬、はては高速道路の開通祝いでまで祭りと名がつけば人が集る。

アメリカのサターン5型ロケットの打上げは山開きや海開きに共通する“宇宙開き”であり、ビジネスショーやコンピューターショーはいまやビジネスマンの祭りなのだろう。東京の丸ノ内のビル群の多くは屋上に杜をもち、霞ヶ関の超高層ビルにも繁栄の神をまつつてある。

祭りが本質を失って休息だけが日常化したのがカレンダーの祭日である。

他のジャンルとの相対に於て……。写真の持つ複写の機能というものはむろん大前提としてあるけれど……。

問 同時代作家の中で興味を持たれる人、作品、又嫌悪されるものは？

一寸、古くなっちゃったけれども方法的に共鳴するのはウィリアム・クライン、共鳴とは意味が違っても知れないが、同世代の人間として中平卓馬……。あまり人の写真を見ていないし、それほど見ることに意味を感じないが、アンディー・ウォーホールには一番興味がある。

問 今、やっている状況の中で外的に不自由は覚えませんか？ 例えば猥セツについて……？

それはある。週刊誌などコマースヤル

ベースのメディアを通す以前に、まず規制がある。その曖昧な基準に問題があるが、これは云って直るものでもないし……、ただ極めてストレートな一枚の写真を、ごく一部の人間にミニコミをすることの有効性よりも、ひとまずギリギリの処でマスコミに反復して多量に流せば有効性を持ち得る可能性がない訳でもない、と云っても、結局、既成のコマースヤルメディアを通す訳だから、これにも限界がある……。

問

報道写真などの暴力性に関して――、例えば残酷な写真について……。カメラの存在そのものが機能から云っても暴力的なものだと思う。残酷なものを写すということは、そこに写す者が入るか、入らないかが問題だと思う。

高梨 豊



情報の中に、沈黙をみいだすこと。
沈黙の中に、情報をみいだすこと。

〈造形作家〉

目の日から鼻の日、耳の日、歯の日と全身各所、種痘や予防云々の身の廻りの祭りばかりと、種痘や予防云々の身の廻りの祭りはかゆいところに手が届き、身の外では港湾から写真、鉄道、航空から原子力の日まで、人間誕生から死亡までの子供の日、成人の日、母の日、婦人の日、老人の日と祭りが人生化する。

そして時の記念日、映画の日、読書週間、新聞週間、文化の日、という文明の祭り、そして祭りはオリンピックの日のように年々歳々追加され、やがては万博の日、いや公害の日も登場しよう。こうして祭りは日常化し、脱日常性という祭りの本質？をも失っていく。

バーは毎日毎夜、一人一人の小さい祭りの狭い広場であり、終電車は酔客のたどる現代の都市の田んぼの畔道なのである。

いまやマイホームのウィーク・エンドも家族だけの祭りである。週休二日の会社ですでに三千を越え、一九八〇年代には年間百六十日の休日が予想され、一年の三分の一の「ままと」のような祭り「がはじまろう」としている。

しかし、いずれもその脱日常性には休息や逃避がともなっている。それは生産社会の悲しい宿命なのである。かつて野で太陽に追われて働いたように、いま人々は時間に追われて生きている。

しかし、非生産社会、たとえば子供の世帯において祭りとは何だろう。非生産的日常からの脱出といえはそれは生産？だろうか？少なくとも休息の形をとることはあるまい。あるいは祭りそのものが存在しないのかもしれない。何故なら日常生活から脱

問

と云うよりもその入り方に問題があるのだろう、つまり人間がその場で機械そのものになってしまふことには、やはり問題があるだろう……。しかしこの事については自分のなかでもまだよく整理されていないけれども、現場に行くことにまったく意味がないのかどうかは解からない……。ただ、一番問題になるのは、その場に於いてカメラマンがいかなる立場に立つかだ……。

問

今、一番具体的にやりたいことは？ 又これから志向なさることは？ 個別の小さなテーマなどは持てない……、撮りたいというよりも、視覚を組織したい。例えば一つの例として日本のここ百年間の写真を、膨大な量にな

大学祭ほど気はすかしものではなくて、ぼくなどはほとんどその期間中の校内に足をふみ入れたことがないように記憶するのだが、それは交響楽団などがある地方の文化都市から、次年度に受験しようとする女生徒がぼく、輝かせて、先輩の後にしたがっているといった風景などが、その大いなる原因なので、そんな景色は漱石の作品どまりにしてほしいと思っていたためかもしれない。

一度だけ、それも東京芸術大学の芸術祭に出かけたことがある。油のK教室に高校の時から友人がいて、ぼくの卒業展のための被写体になってもらっていたためで、仮装行列やチャカホイなどにさすがはと驚き、伝統的なんだなと感心などしたのだ。このクラスにはハイレッドセンターのセ

出する必要がないからである。彼等にとつての非生産は常に楽しく、安らかであり、生産は厳しく、煩わしいことなのである。万博にはお祭り広場があった。いわく、

「今こそ全てを忘れ、一つの大きな統一のもとに人間復活のための祭りが必要だ。すべての人間が手を取り合い、祭りの輪をつくろうと……。」

しかし、祭りが脱日常であるという定義に誤りがなければ、お祭り広場の祭りのその存在価値、存在理由の裏を読む必要がある。世界の人、地球上全ての人々は日常生活に追われ、頭の中がいっぱいで、インタナショナルに広場で踊ってなんかはいられないのであり、見ることに、廻ることに老いも若きも忙がしく、ビジネスのように会場を駆けめぐり、万博旅行は日常生活の変型

銀座の卒業展会場で友人のガールフレンドはぼくに向って「生活綴方ね」といった。

大学祭へのぼくの偏見や気はすかしさの何であつたかは、ここまで書いて来て思いあたるのである。

〈写真家〉

にすぎなかったのである。

祭りはこうしてビジネス化、事務化し、かつての祭りの本質を失っていく。本質をここではいうまい。ただ日常の非祭り性のなかから祭りは爆発した。しかし、日常の祭り性のなかからは非祭り性が祭りの意味をもちはじめたのである。すでにセックスはフェスティバルの意味をもとうとしている。しかし、新しい祭りは、はじまってい

〈イラストレーター〉

憧れのニースの丘から焼けつく 閃光の朝は酔夢顛倒如盲聾

一文依頼願末譚

通称上野の森から一夜都離れ、続さんの赤城山過ぎれば、群がる観音菩薩の影も消え、死路を急ぐ旅人もいた奇怪な山腹へ突き進む列車止まらず。オレンジ色の車体を煌めかして軋ませて、食欲そそるらしい確氷の隧道をくぐり抜ければ摂氏3度は寒からう別天地、空は真から青かった。が、そこはもうお気に召さず、シャンシャンと鈴の音懐かしい、古き、良き三筋の煙、そう云えば名前もずつと懐古園とはシヤレている小諸の園を左に見て、なおも鳥瞰する白い丘・屋根・泉……、近頃、唯一のお気に入りだった。

むかし、むかし、免許取りたての燃える日々、愛車を駆ったルート18は今……。
扱て、この燦々と白くへ死んで滅亡して変貌した夢幻の感覚世界に、大好きななつかしの松本ノックちゃんと熱い風に髪靡かせて闊歩したやはり夢……か。
寒い土地で顛末譚書く手筈が狂い、過ぎし刻は幾らか、母上の心尽しに腹脹れ、照しに忽々と引き返すみつもなさ。助けてくれー東ノ。訳も無く熱いヨー都築ノ。白馬は嘸かし心持良からうに。だが身持悪いが世の慣性。相変らず電話恐怖症に悩まされ、言葉の困難さをよくよく認識させられて、排泄する弁も霧消、飛躍し、沸き立てのコーヒーでベーコン流し込むもカタ無し、儚シ。
ああ！厄日！！

田中長徳氏に答えて、ばくもトライX使っています。と云った処でシャッター押せない。撮らない、のではなく、何を撮るか解からない(どれ程も撮ってはないのだが)のだ、と心底吐いて、(凶区はいま危機である(菅谷規矩雄ユリイカ8))のか、なぜ？、と邯鄲のはしるようにあたふたしてみろ。
沈黙のうちに根源性を潜ませて、書けないことを書く、という可逆(?)のパラデックの多岐性——懷疑の知覚は技法のみか——い……。
——「世界は終わった、が、まだ初っていない」——、この不可避の二重に今、不在のような世界にあつて、例えばあなたすでは逮捕されているとしたら、「ブタは食べられる為に在るのだ、ブタの命は悲しいの

だ、ニヤロメ！」と同様に、後は怨恨のみが続くだろう。だが、些細な裂目でも見つけたら、恐らく突き破ろうとはするだろう……か？——ではもう、不当とか正当、人間的とか非人間的、「不条理だ」などと云う言葉を必要としないだろう。唯、ある、見えるだけなのか？、やっぱり……、そうだとしたらへまだまだ前夜なのだろうか？。
そして、生きていくことも、死んでいることも同一の存在次元に共転していてへ空っぽになるというこの素晴らしきによつて変貌した世界、期待もなく、よつて絶望もない、静謐で謙虚な世界に新しく漂っているだけなのか……。少なくとも、否……と、どうして拮抗できないのだろうか——？。ル、クレジオのこの絶妙で繊細で微妙なニュアンスの逆説(?)に如何に対峙するんだが……、それともへ死ぬまで騙される決意もついたのか……？。高松次郎氏——その次にやってくるものは何？……：真鍋博氏——大衆に入つた空想家の明日は？吉村益信氏——無理云つて、何か言つてくれ！とお願ひした。
金井美恵子氏——むかし、高崎に才能ある少女がいる……と云うことを読んだ記憶があつたのだが、目白の家に伺つて、どうもとピヨコンと頭を下げられて恐縮してしまふ。ばくの方が年一ッコ下だと思ふんだが……。あのゾーとするような白日夢を奏で続ける少女ドクトルが今……。「愛の生活」はノンフィクションでは(?)と思つていたのだが聞くのを忘れる。
石岡瑛子氏——今でもあの「シンポジウム、現代の発見」の連作は絶対いいと云う友だちがいて……、むかし気品溢れるスーツに美

るのか、し得るのか……。
どんな論理も、一括して混沌とか、模索というような言葉に置換されてしまひそうな、一見膨大な許容のさ中にいても、描く、書く、見る、想像する、概念化する……etc——総ての像(イメージ)を意識のうちに顕在化できることによつてのみ、オイディポス王も現実的なのは事実のようなのだが……。だが、オリジナリティーの所有を掌握することなど今、一体何になるのだろうか。

むかし、身の丈程もある千円札に、軀を半分以上も隠されて歩いてる男の写真を見た。瘡せ駄馬ロシナンテに跨り、片手に洋槍を掲げ鞭打つ男のように滑稽に見えたものだった。だがその後、「滝口修造の……」(本の手帖)を読んで、ああ、あーあと好きになつてしまった赤瀬川原平氏だったのだ

が。まずは自分の不規則な脈絡のない断片的な概念把握の自己帰結性の貧しさを物語つてしまつて、後に述べる諸氏への最低限の礼節と心得たいのだが……。実際、その印象が覆されて帰つてきて困惑してしまつてゐる。森山大道氏——なぜか、どうしても「にっぽん劇場写真帖」の終りに入つた方の右ページに載っている、コートを纏してカメラを構えている三態のベタを引き伸したような写真像のイメージと、その視線が頭に入つていて、初めて伺つて会つた時に、その繊細そうな風貌に何から話し出していいいのか戸惑つてしまふ。引き返す訳にも行かないし……。好きな食物は、との質問に、照れくさそうに笑いながら「お子様ランチ」と答えて、年を気にしていた様子なんか可愛しくて共感してしまふ……。とにかく、「大道」という剛毅木訥な素敵な

名前を冠して……、大道は魔れない……。高梨豊氏——どちらかと言うと、凄まじく相手は恐らく立ち竦んでしまふだろう風采に驚いてしまふ。だが、その視線の奥に気の優しさを秘めて……。中平卓馬氏にはどうしても連絡がとれなくて残念だった。
多木浩二氏——私は万博と安保反対とが両立するような思想を思想としては信じない……。(デザイン批評6)、この時、初めて多木氏の断片を知つただけでも……。例えば両立する(?)人であつても、これはへ……たとえ平行線が一致して、ぼくがそれを自分で見たとしても、自分の目で見て「一致した」と言うにしても、やはり許容しないのだ……。とは本質的に異なるのだ……。ぼくらはもう、ちよつとや、そつとこのことでは騙されなかつてもり

いるんだが……。それともへ死ぬまで騙される決意もついたのか……。高松次郎氏——その次にやってくるものは何？……：真鍋博氏——大衆に入つた空想家の明日は？吉村益信氏——無理云つて、何か言つてくれ！とお願ひした。
金井美恵子氏——むかし、高崎に才能ある少女がいる……と云うことを読んだ記憶があつたのだが、目白の家に伺つて、どうもとピヨコンと頭を下げられて恐縮してしまふ。ばくの方が年一ッコ下だと思ふんだが……。あのゾーとするような白日夢を奏で続ける少女ドクトルが今……。「愛の生活」はノンフィクションでは(?)と思つていたのだが聞くのを忘れる。
石岡瑛子氏——今でもあの「シンポジウム、現代の発見」の連作は絶対いいと云う友だちがいて……、むかし気品溢れるスーツに美

貌を纏つたナナメ向いに座したことがあつたのだが、無理を承知で電話して——元気がないネエー、熱心さが感じられないワネエーなどとバンバン云われてみると美貌のイメージも崩壊の途を辿つてしまふのはなぜ……？それでも承諾してもらつたのだが……。

夢、又夢のあけくれに天気同不順……。

独白——こんな事、書くつもりじゃなかった、羞らひもなく、ただ、他にすることがなかつたから、V S O Pも角壘も底をついた、東ノ悪いことしたんだって、オレもだよ……、芸術祭又やるんだって、安原が写真出してってくれて言つたぞ、仏語少しは覚えたか、オレは相変らず「L'action n'est pas la vie」だけだよ、住田君は元気だよ、まだ「ファンキー」にいる、きょう昇ちゃんに会ふんだよ、青木もいっしょかも知れない

い……。もらつて来た原稿渡して……。最所から自家懂着してしまつていて一つのテーマを設定できなかったことに問題があるのだが、それでもなお……というのが実際だった。後は急転直下解体へか、少しづつでもコミュニケーションの……。最後の場面の笛の響が……。こんな状態で初めに電話したのが岡田隆彦氏だった。理解できる言葉だったのだが、断わられたのは残念だった。ぼくの好きな「おびただしい量」「街」「ひとりの女にささげる恋歌」などの詩人に乾坤一擲何か言つて欲しかったのだが……。立ち読みした「フィルム」かなにかの中で「ひとり虫のように映画を見て／布の上に異国の女を追つて汗ばむ昼下り」などと当時のわたしは書きつけたりしながら……。と、やや自嘲じみて云

つていのはなぜ？と、電話した時、詩のファンですが、などとせめてもの抵抗を試みたのはむろん早合点の失敗だった……。それからどうしてもお願ひしたかったのが吉増剛造氏——もう三年ぐらい前、ランポオ以后まだ詩を……。などと無知も甚だしく高をくくつていた貧しい見者の少年を一変に転倒せしめた悲劇(?)がヘジナロロブリジタと結婚する夢は消えた／彼女はインボを嫌うだろう……。『出発』だったとは、かなり主観的独断か——そこにはこれだ！という予感を潜めた錯乱があつてしまつたのだ。もう……。例えばへ剣の上をツツツと走つたが、消えないぞ世界ノ！朝狂つて」などの絶句する驚きより、ばくの独断の方が今でも面白かつたと思つてゐるのだが……。下北沢、不吉！不吉！と連呼を続ける詩人の住むその下北沢へ出掛るのだ

——ひとまずケッタイな店「マサコ」で忍者武芸帳読んで、扱て……。最後に、「芸大」と云うことで書いてもらえなかつた人たちもいた。たぶん昨年のこともあつてだろうが……。昨年の自治会執行部とその集団のつた陋劣な策動は穢汚として消えないだろう、ナシヨナリズムや官僚主義に裏打ちされた民主連合かなんかかなんか……。言葉が消えてゆく……。どつちにも属さない処で浮遊して……。最後の一滴、ばくに吞まれて、待つてくれー都築ノばくも白馬にゆくぞ、後は知るか……後は……。愧死。
《野沢》



《発言》

美術学部学生自治会委員長

小林正秀

権力の祭と人民の祭、その違いを示してやろう！

今、我々の前に一つの空騒ぎが終った。人々は膨大な情報にかり立てられ、乏しい金をためて行った。リュックを背負った老婆が、“資本の母”なる太陽の塔の下でキンキラキンと輝く不気味な眼光に射すくめられ、じっとうつむいて大きな吐息をついていた。若者は、与えられた広場で“踊れ！踊れ！”という笛の音になすすべもなく立ちすくんでいる。幾多の政治的陰謀の下に企てられたこの権力の祭典……僕らは今、そこに戦前の国家神道の祭祀の復活を見た。

祭は古来、人民のエネルギーを象徴するものであった。原始共同体社会において、それは生の讃歌であり、生在と繁殖の祈願であった。古代人は狩漁の合い間、農耕の合い間に祭を行い、新たな生への出発点とした。階級社会が出現するに従って、祭は支配階級の司どるものとなった。人民を支配するために、目に見えぬ幻想的絶対権力が必要となった。雷鳴、嵐、太陽は人知の及ばぬ恐怖、喜びであり、支配階級はその親族である事を表明し、恐怖、光の具現者として拝閲を強制した。

しかし、人民もまた搾取と隷属の中で解放と生命の躍動、生産の喜びを歌いあげる人民の祭を生み出していった。それは人民が古い支配階級を打倒して新しい力関係を作り出す時、支配階級打倒のエネルギーの象徴となり、団結と連帯の場となった。

祭はこのように支配と被支配の相克の中で争奪され、祭展させられてきた。人民は常に幾多の血を流し、権力の祭を奪還しようとしたし、人民の祭を自分の手で作りあげ、権力の手から守り抜いてきた。叛乱のためのエネルギーの蓄積、謀議と決起の集会とした。人民の祭はまた、勿論“祭”としての意味を持った。人民は、自分達の民主主義の中で自由に企画し、演出し、アクションし、陶醉した。男と女は、年に数回の祭の日に、抑圧された生活と因習から抜け出、公然と愛しあう事ができた。しかしそれらの自由と解放は、単に自らを取りまく一切の状況を忘我するだけの現実逃避ではなく、自らを新しい支配者たらしめる団結の力の示威と発展への契機であった。これのない祭は、必ず権落し権力の介入の前に無力であり、支配機構の一端と化した。

——これが人民の祭の全ての歴史を貫く“人民の祭の論理”であったらう。

芸大の芸術祭は、人民の祭の論理から生まれたであろうしこれからもそうであらねばならぬ。もしもその

論理の貫徹しえないほんの一隅でもあれば、我々はその真空空間を我々の空間に斗いにとってゆかねばならない。だからまさに全ての接点に、人民の自治の斗争と祭の論理の有機的結合があった。人民の自治こそ、人民の祭の維持と発展の基盤であった。それは祭が争奪せられてきたとすれば、当然権力支配と人民自治の斗争がその基盤にあると言えるからである。これは僕が自治会委員長であるための論理の暴力ではなく、歴史の事実であり、これまでの人民の幾多の血の証言であった。祇園祭は、中世、新しい勢力として成長してきた京の町衆が、河原者達との連帯の下に、武士との都市の自治権争奪斗争を行う中で再興された。田植え祭等の農民の祭も、村の自治組織“惣”の確立の中で生まれ発展した。やがて惣は、強力な貴族の中央権力が崩壊し新しい支配者にのし上がろうとする武士階級があい争う中で、第三の勢力として独自の主張と要求である、農民の解放、自治の拡大を目指して立ち上がった土一揆の母体となっていった。——ここにこそ、人民の祭と自治と斗争の確呼たる結合があった。

芸術祭は、学生が作り出し学生が発展させてきたものであり、その底には言うまでもなく学生の自治斗争の全過程が横たわっている。我々の自治とは、“学生が自分達の手で何かを行う”それらの総体である。これらが全て弾圧されるなら祭は崩壊するだろう。停滞した時、祭は権落するだろう。我々はその突破口として自治斗争の力強い展開と新たな獲得と発展があり、その終結点として再び祭がある。

しかし今日、我々の祭を奪還し体制内化しようとする権力の攻撃は、祭を軸に権力と我々が対峙する、或いは暴力をもって破壊するという単純な平面的構成ではない。彼らの新しい祭の奪還の手口は、物理的にではなく、精神的に行なおうとするものである。それがまさにあの万国博であった。——学友諸君、忘れてはならない。万博は本来ならば四年に一回、71年に行なわれるものであった。しかも6月23日を中心にして計画されている。その政治的意図は明白である。国民の脳裏から6月23日の重みを忘却の彼方に追いやり、権力と資本の“絢らん”たる“芸術・文化”の空騒ぎで国民の斗争を骨抜きにしようとしたのだ。しかしながら6月23日は周知のように60年安保斗争を上回る壮大な斗いとなった。既に始ったと言われる来年春の都知事選斗争においても、彼らの空騒ぎは“昭和元禄田舎芝居”に化しつつある。

我々は、この莫大な金と権力が動いた空騒ぎに、我々のささやかな自治会費と清烈なエネルギーでもって対抗してやろうではないか。権力と資本に統制された不毛の文化、芸術の荒地に、水々しい植物の集落を現出させよう。受けて立つ姿勢から、攻撃的な斗争姿勢へ……権力の祭と人民の祭の論理の差異を明確に示してやろう……70年という我々を取りまく一切の状況をたたきこめ……不十分ながらも我々の自治と斗いの基盤から……そして更なる発展への確実な第一歩に！

70年芸術祭、それは僕らの祭なのだ。

音楽学部学友会執行委員長

大森文隆

『芸術祭によせて』

「1年生の時は希望、2年で怠惰、3年で焦り、4年で絶望」という言葉が芸大の中で通用していることを、多くの学生が認めている。このような事実は、他の音大の具体的なアンケートでも明らかにされていることでもある。これは単に、主体的な力量・技術・情熱・努力だけの問題ではなく、専門の＝すきな音楽でもって生活していく社会的基盤がない、という現然たる事実を前にして、我々が芸大で学んでいる「クラシック」が今日の社会における役割・位置が問い返されようとする時、卒業してからの展望がつかめないからなのだろう。

音楽のバイトをしたり、ある時は音楽とは関係のない仕事等＝自分の芸術形成や技術向上でない所での音楽生命・能力の消耗・切り売りを余儀なくされている現在の芸術家、又、その仲間入りをしようとする我々音楽生。

このような現実の中で個々の目標を考えることは、芸術を志す者にとっては不必要なことなのだろうか？学生にとっては不謹慎なことなのだろうか？

音楽界においては、ステレオ・レコードの発達と、音楽会の入場券が高額の為、聴衆の多くは潜在聴衆となり、聴衆の分極化をおこしている。又、地方民間放送の集中化による、ナマの演奏家の不要性や無制限な外来演奏家による圧迫。各演奏団体の経営不振。等々の状況があり——

学内においては、実技レッスンの不満。レッスン室使用時間の延長を。自由に作品・演奏を発表・交流出来る場を。他の音大生との交流を。より良い勉学条件のための設備の整った新寮を。等々の声が高まっている。——

このように我々は身近な事から将来の生命にかかわる大きな問題まで様々な矛盾と課題をかかえている。

我々は、芸術祭へ向けての様々な準備の中で、又、期間中の多様な催し物や創造的行為の中で、こうした矛盾と課題をいろんな形式で感じるだろう。もし少しでも全学友がそれを感じ、これから自分は・我々はどうすれば良いかをあらためて考え、創意性を高める機会になれば、この芸術祭は成功といえるであろう。又、そうした日常我々が吸っている空気を新鮮な気持ちで感じ、考えられるような積極的な取り組みの芸術祭にするために一人一人が努力しなくてはいけない。

芸術は「人間」を目ざすものであるはずだ。が・はたしてどんな困難があろうと、我々は「人間」として生きること努めているのだろうか？我々は我々の正当な権利を主張するのは義務である。

我々芸大生にとって“正当な権利”、“義務”とは一体何であろうか？……………

6・19全都芸術系学生連帯交流集会の経験がある。あのエネルギーを発展させ、音楽系の学生の連帯と交流を持続的に深めていくことを、この紙面を借りて提起したい。

《随想一題》

つくづく思うことはただ一つ、「美しい音楽」をいつも書くことである。感動し説得力に満ちた完成度の高い作品を創ることである。

作曲を志してから現在まで私はそれのみを考えつづけている。そして今後も切に私に迫ってくるであろう。

私は今一つの解決点を見いだした。よい作品は、楽器への愛情に基づいて生まれるものである……。比較的私はこの点に関しては努力しているつもりである。私は演奏者とのつきあいがわりと多いなかで、彼らが自分の楽器に対して想像以上の愛情をそそいでいることを発見する。

作曲という行為は、作曲者の心に映った音、音群の変化の過程を最も必然的、かつふさわしい楽器、あるいは楽器群に託して定着させることである。そこには暖かさと音楽への愛情はもちろん、人間への愛情、楽器への愛情がひとかたまりとなって存在する。つめたい音楽を書いてはならない。

作曲者はまず自分の「音楽」を定着するに最も適切な楽器を選択する、ここをまちがえると、心に映った音楽的效果は半減する。さらにその楽器の特性や奏法を欲を言えば演奏者と同じくらい知らなければ作品に大きな表出力を期待できない。だが、作曲者はすべての楽器を均等にこなす技術をもちえない。それはしかたないとしても楽器を理解することは、演奏者とのつきあいのうちにある程度までできうことである。私が、ここに一つ思うことは、楽器の特性、その効果的な表出法は、奏法の自然さを越えるものではない……。というよりもむしろ生理的、心理的に苦痛な奏法はその楽器の特性をころしてしまう場合が多いと言うべきか。

作曲者がある楽器を使用して作曲をした場合その楽器を用いる何ら必然性も感じないようだったとしたら、あきらかに説得力は半減し、その作品は失敗作である、と私は思う。

作曲という行為は、いや音楽は、全くの天才でないかぎりその過程のすべてを「感性」にたよってはいけない。もちろん「感性」は大部分である、だがその「感性」の定着手段の過程は明らかに「知能」である。演奏の行

為にも同じことが言えよう。

その楽器の特性を最大限に生かそうとするならば、満ちあふれる情感の他に明晰な頭脳を必要とする。シューベルトのピアノ作品が弾きにくいのも、彼が全く満ちあふれる情感にたよって曲を書いたと思える。—ピアノ曲の分野においては、彼は不幸な作家であるしまた逆に幸福であったとも言える。



さて現代は様々な作曲技法による作品が生まれている。楽器の新しい特性をひきだそうとしている。だが忘れてはならないことはただ一つ、その楽器への愛情である。それなくして作曲はできない。

ある作曲家の曲を一度弾いたために、その楽器が故障をきたし使えなくなったり、奏者が病でたおれたりするようでは、何の為に作曲するのであろう。そこには人間への愛情も楽器への愛情も存在しない。ただただ、作曲家のエゴイズムのみが存在する。

人間の限界に挑戦するのではなく、自然に挑戦するのが「芸術」であると私は信じている。既成を習統し、未知の自然を発見し、それを定着・習統し、音楽という一つの芸術を築き上げる精神。私はその精神を大切にしたい。そうすれば、まだまだ人間の手によって新しい、美しい音楽が書けると思う。

私は「作品発表」として終る作品を不幸だと思う。演奏者が愛着を感じる曲を創りたい。

私は昔からアカデミックなソルフェージュ教育を受け、音楽教育を受けたが、それは私の「美」の感性を曲げたりはしていない。音楽は美しくなくてはならない。

「美しく」演奏されなければならないと同様「美しい」作品を書くべきである。

実験的にいろいろなことを試みることに賛成である。私はいつも「実験」を考えている、が、私は「美」を逸脱してまでその範囲をひろげようとは思わない。何もかもいっしょにしたようなハプニング行為で人をこけおどしにする曲を私は音楽会でよく耳にする。そのたびに私はそのような人たちを不幸に思う。ソルフェージュの能力がある者ならば決して美しく感じない音響を作曲者の自我のみで書いているとしたらもはや不幸としかいいようがない。そのような曲がたとえおもしろくとも人間の深層心理に達してくるべき表出力、説得力をもった「芸術」であるかどうか疑わしい。

音楽はもっと素朴で人間的なものである。

人間の情感……あのきわめてもろい、不規則な気まぐれなものが、今までかくも鉄以上にかたい強い哲学をもった「芸術」を創りあげてきたのである。

思えば、私はもっと人間の情感を大切にしたい。

そして「美しい音楽」を書きたい………といつも思うのである。

工芸科3年
無題

はら たかし

さっきまで風いでいた 海が
二角波をたてはじめ
雲は太陽をかくし、みるみる空をおおう
あたりは暗くなり
波頭の白さだけが不気味に輝く
沖にあった波は ふくらみ 満ちて
巨大な憎悪の塊となって岩にぶつかる

意識的にそうさせたのを
俺は知っているけど
もうどうしようもなくなってしまった
神経は肉体の表面に露出し
ビリビリ痛む
もう死にそうだ まだ死ねない
ガンガン響け 俺の心臓

おまえは俺の眼の中で
小犬のようにとびまわる
それでも俺の視線は
おまえを補えて離さない
俺はおまえを抱きしめて
その小犬のような自由さをうばいたい
そしておまえはいつか
俺の腕の中で涙りにつく
そう思いながら、今も
おまえをじっと見つめている
おまえが俺のこの眼を読みとる日まで
ずっと

俺とおまえと、今はそれだけ
一つの部屋で
3 m平方のこの部屋で
俺とおまえと、それだけだ
聞こえるのは
俺たちの心臓の音、呼吸の音
壁の向こうに何があろうと
知ったことではない
あるのは
この部屋の内の、おまえと俺

琴・三絃

山形屋

宮田楽器店

日本橋蠣殻町1-15 TEL.(666) 3802

邦楽図書楽譜出版

— 目録書進呈 —

東京都港区芝西久保桜川町1
株式会社 邦楽社

電話(591)代7271

腐化した臓器の宇宙で為す術は？

荒涼たる彼達の瞳よ、瘡蓋だらけの彼女達の瞳よ、
顔面に白に黄にDohranがぬりこめられた女を視やれ。
閃光か、識閥か、いずれにせよ、ひからびた大地によって、
おまえ達の脳天はガラスの破片と化することだろうよ。
倣然と立ちはだかる人間どもよ、
生涯、白に黄のDohranの涙を放出するつもりか。
ひからびた女の唇を濡らせ、輝割れた大地を抹殺するんだ。
さもなくば錆びついたミシンの涙がおまえ達を抹殺するだ
ろうよ。
縦しんば、女の頸を摩り上げたにせよ。

倦怠たる彼達の瞳よ、蛔虫だらけの彼女達の瞳よ、
輝割れた大地に手を突っ込んで抉り出された彼奴は何者ぞ、
阿婆擦れ女の瞳が爛々と輝くとき、
抉り出された彼奴はアルルカンの深き涙を流すか、
締めりのない涙腺から滴りおちる醜女等の懷疑の涙か、
お、お、破丘たる女の臉が、
奄々なる呼吸さえも、封じ込められようとしている。
天空に正円な瞳を描けよ、
さもなくば、砂丘たる女達、男達の臉が、奄々なる呼吸さ
えも封じ込められてしまう。
縦しんば、くすんだ黄色味と緑味おびた肌をもつ、アルコ
ールづけの胎児が叫喚しようとも、

立ち止まってくれたまえ、振り向いてくれたまえ、戻って
きてくれたまえ、
Dohranをぬりたくった女を、
輝割れた大地から抉り出された彼奴を、
正円な鐘の音としての、正円な鐘を描いてくれたまえ、
あ、あ、後生だから
さもなくば、俺の涙は抹殺するだけだ、おまえ達の臓器をな。

思考

何かを仕出かす季節だ、とんでもないことをな、
何かを思い識る季節だ、どうしようもないことをな、
それでいて熟したいち、ぐの甘さが漂う季節だ、それをも
すぐに腐敗することを人間達の脳裡に漂うのだが、

審

俺はそれが何人であるかをすでに観てしまったのだよ。
あまりに手厳しい、あまりに切ない、あまりに美し過ぎる、
あまりに……..
そんな猶予は一つかけらも残ってなぞない、一つかけらも
な！
おまえとこの世とを結んでいるものが鎖でもあると云うのか。
人間どもよ、識るがい、んだ。

俺はそれが何人であるかをすべて観てしまったのだよ。
俺を氷結するかのように、身動きなど許されぬ瞬間だった
のだ。
人間どもがいかように嘆いても、叫ぼうとも、時計のある
部屋から、一歩たりとも抜けだせはしない。

俺はそれが何人であるかをすでに観てしまったのだよ。
………隙の重さをな。

古来から形而上へと逃避行
それは人間の本性か？………そんな形而上、切りきざ
んでやる。
もうすでに眼覚めるときが来てしまっている。
人間どもよ、識るがい、んだ。

相對

女の絶句より、溢れおちた存在？
それは純白であり、純白でない、
それはどス黒く、どス黒くない、
意味があり、意味がない存在？

愛

愛に目醒めたとき、僕を知った。
僕は自己欺瞞がお得意いだ。
そのくせ、涙の意味を尊ぶ人間だ。
めくるめく速度で、そして鈍く回転するこの世界、
僕は浮足だて、君を見、彼を見る。
だが、僕は僕を信ずる。
どのような行為を行なうとも、

愛に目醒めたとき、彼女を知った。
僕は心でこう言った。「君はすでに大きな行動をした」
そのくせ、涙で君をうらむ人間だ。
めくるめく速度で、そして鈍く回転するこの世界、
僕は満足だ！故人の霊に対して深く、静寂を保ちうる臉、
だが、ぼくは君を信ずる。
どのような行為を行なうとも、

愛に目醒めたとき、彼を知った。
僕は常に孤独を憎み、神を憎む。
そのくせ孤独を願い、涙を臉で受けとめる。
めくるめく速度で、そして鈍く回転するこの世界、
僕はこの世界の征服を企む。
だが、僕は君を信ずる。

どのような行為を行なおうとも、

僕は描けない、と、心の中で思うとき、現実態としての僕を客
観視したとき、やはり僕である。「描けない」という言葉には
「描く」という意識が前提として、意識的時間的な存在として存
在する。「描く」ことが僕であるのなら、このときハルトマンが
言う非実在的後景（精神的内包）としての僕であるが、その描
かれた僕とは何であろうか。実在として僕によって僕が描かれ
たそのものは決して僕ではない。それは紙であり、布であり、
顔料であり、空間を錯視させるものである。その一つの画面か
ら表出されてくるもの、知覚し得ぬもの、意識のカテゴリーで
の感知可能なものが僕である。まさしく、ハルトマンが言う非
実在的後景である。

東京

東京のド真中歩けば、いやでもあそこが気になる。
赤くなって青い血を吐き、スカートめくって興奮めするの
がいつものことよ。
けだし、あいつもそうかも知れないさ、
しこたま、綿袋に赤いもの、黄色いもの入れて赤くなって
青い血をはきや綿袋が破裂する。

「

何もない、たゞ偶然としてのものとの関りでしかない。
青黒い空に散って、真つ赤な道路に寒さを感じ、それでも
しきりに口を動かしてる二人。黄色いものかくして
「お兄さん、よってかない」

と僕に媚びる女、
木立が僕を興奮させる。
静寂な彼女との関係、
何もない、たゞ偶然としてのものとしての関り、
それでも興奮する。

追想

のらり、くらしと歩く、つれづれなる我心。
さして喜びも、苦しみも、悲しみもなく、
唯
のらり、くらし、歩く、歩く。
朝、何とはなしに起き、何とはなしに授業を受け、
一日が過ぎる。
あ、あ、淋しい、切ない、
何がこんなに淋しいという気持を駆り立てるのか、
何にもない、何もないこのが淋しい、淋しいと駆り立てるの？
欺瞞と打算、
今の僕には、淋しきで充満し、僕の存在するところがなく
なっちゃう。
何かを意味づけてくれるもの、意味？ そんなものありや
しない、
音楽、映画、スポーツ、………？
いや、これらは一つの手段に過ぎない。

「

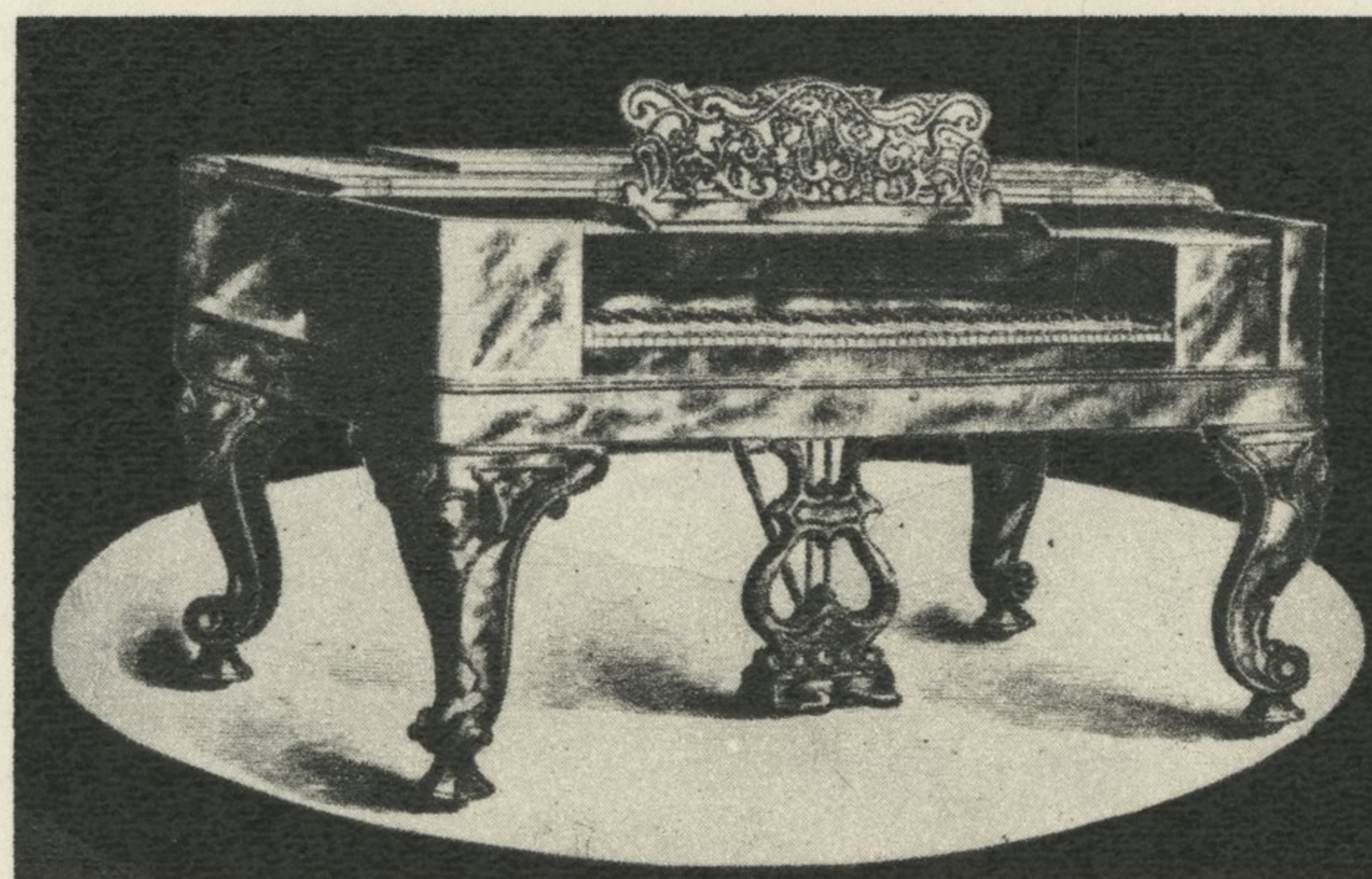
そこには何もなかったと、正直のところ何もなかったのだ、
とは断言できぬ、
なぜなら、それは認識されぬものだから、
唯、相対的にのみ、認識され、意味づけられる。

〈工芸3年 青木恒彦〉

山野サロン・コンサート

バロックをあなたに

出演 古典音楽協会室内合奏団
三瓶十郎(解説・指揮) 宮
本明恭(フルート) 山口貢
(チェンバロ) 他



例会：毎月第一月曜日 6時半～
会場：山野楽器銀座本店4階ホール
会費：月400円
詳しくは山野楽器レコード売場にお尋ね下さい
中央区銀座4-5-6 (562)5051



山野楽器

学校法人 服部学園

御茶の水美術学院

■本科 (修業年限 3 年) 昼間

デザイン部 絵画部 (油絵)

〈本格的専門教育を行い卒業と共に実社会で活躍出来る人材養成〉

■基礎科 (修業年限 1 年) 午前組・午後組・夜間組・昼間組

デザイン・建築・油絵・日本画・彫塑・デッサン

〈初心者 of 初歩素養・本学院本科・芸大美大受験実力の養成・訓練〉

●特別クラス (4:00P.M-5:45P.M)

〈高校在校生対象 石膏デッサン技法〉

●講習会 春期 3 月 夏期 7 ~ 8 月 冬期 12 月 ~ 1 月

入学案内送料共 150 円

交通至便 国電お茶の水駅(明大側)交番横徒歩 2 分

東京都千代田区神田駿河台 2 - 3 (〒101) 電話(代) 293 - 8 7 3 6



代々木ゼミナール 芸大受験 美術科

昼間部

デザイン・日本画

油絵・彫刻

学科時間 16 30 - 18 : 00 実技時間 9 : 00 - 16 : 00

建築・芸術学

実技時間・日曜日 9 00 - 16 : 00 学科時間 8 : 40 - 16 30

夜間部

基礎デッサン・デザイン

油絵・日本画・彫刻

実技時間 17 : 00 - 20 : 00

日曜基礎デッサン

午前部 9 00 - 12 00 午後部 13 00 - 16 : 00

〒151 東京都渋谷区代々木 1-27 電話 03-370-3261・案内書呈

学校
法人 代々木ゼミナール・美術センター

学校法人 服部学園

御茶の水美術学院

■本科 (修業年限 3 年) 昼間

デザイン部 絵画部 (油絵)

〈本格的専門教育を行い卒業と共に実社会で活躍出来る人材養成〉

■基礎科 (修業年限 1 年) 午前組・午後組・夜間組・昼間組

デザイン・建築・油絵・日本画・彫塑・デッサン

〈初心者の初歩素養・本学院本科・芸大美大受験実力の養成・訓練〉

●特別クラス (4:00P.M-5:45P.M)

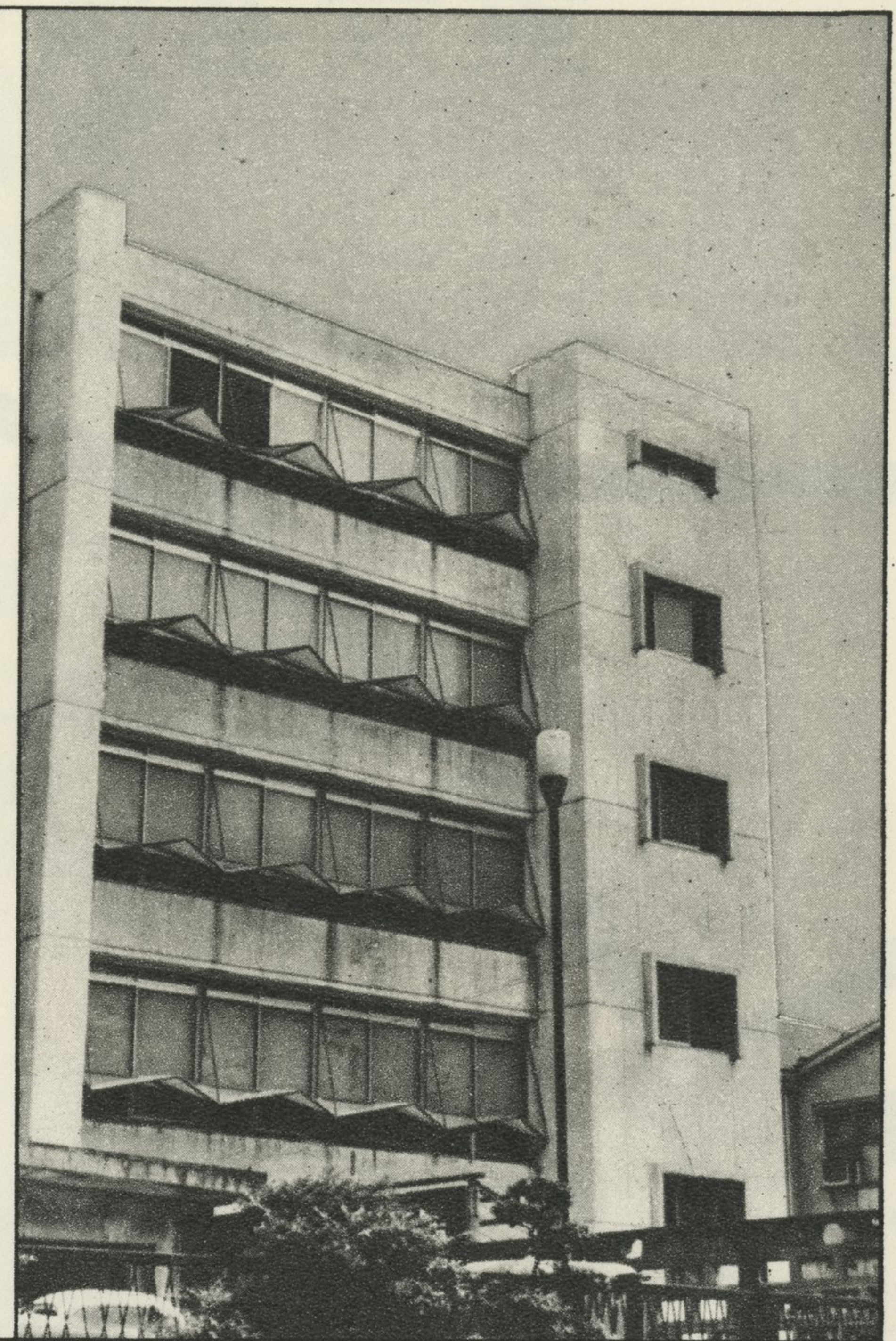
〈高校在校生対象 石膏デッサン技法〉

●講習会 春期 3 月 夏期 7 ~ 8 月 冬期 12 月 ~ 1 月

入学案内送料共 150 円

交通至便 国電お茶の水駅(明大側)交番横徒歩 2 分

東京都千代田区神田駿河台 2 - 3 (〒101) 電話(代) 293 - 8 7 3 6



代々木ゼミナール 芸大受験 美術科

昼間部

デザイン・日本画

油絵・彫刻

学科時間 16 30 - 18 : 00 実技時間 9 : 00 - 16 : 00

建築・芸術学

実技時間・日曜日 9 00 - 16 00 学科時間 8 40 - 16 30

夜間部

基礎デッサン・デザイン

油絵・日本画・彫刻

実技時間 17 : 00 - 20 : 00

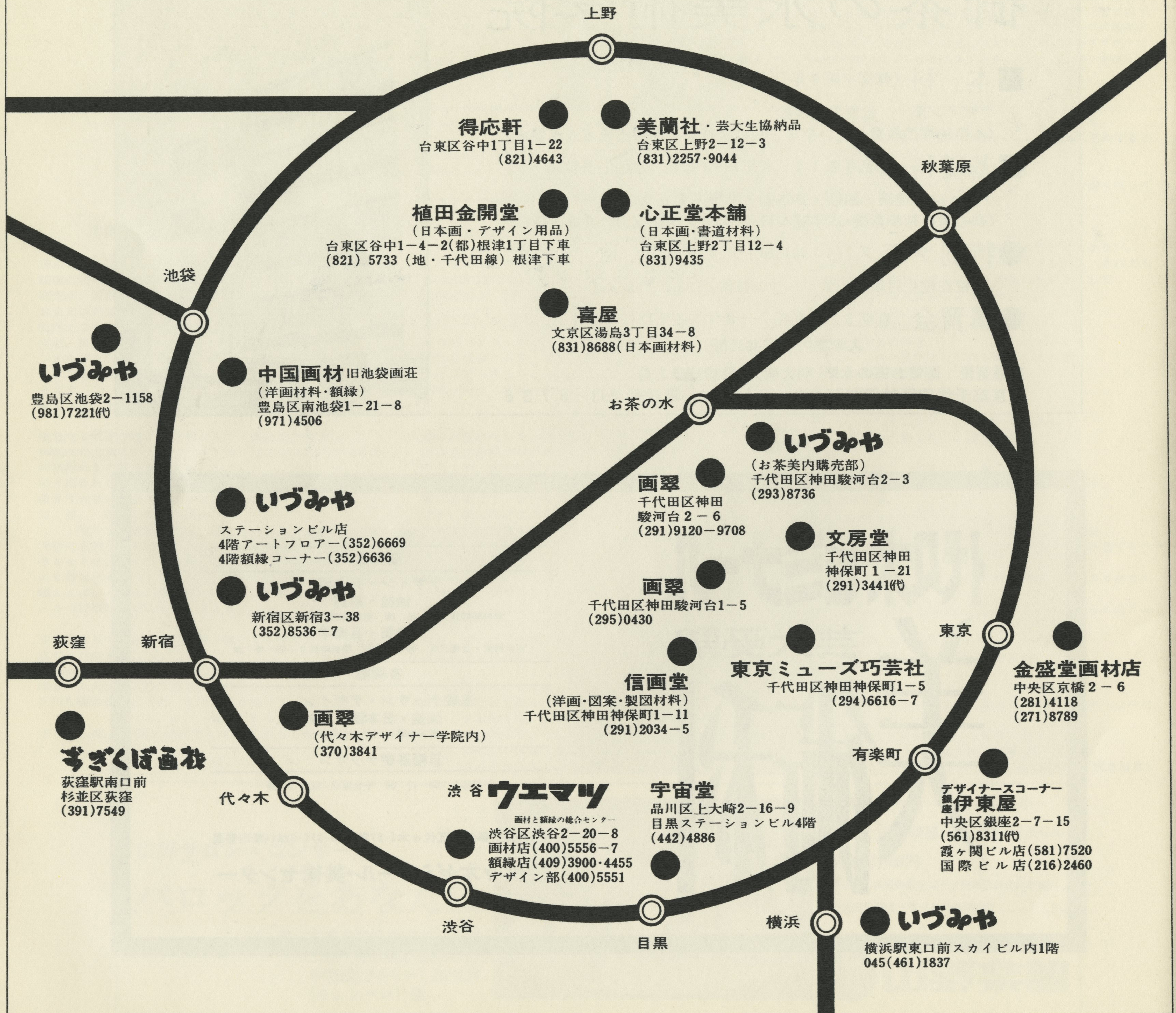
日曜基礎デッサン

午前部 9 00 - 12 00 午後部 13 00 - 16 : 00

〒151 東京都渋谷区代々木 1-27 電話 03-370-3261・案内書呈

学校
法人 代々木ゼミナール・美術センター

東京芸術大学芸術祭協替画材店



◇芸大・美大受験◇

新宿美術学院

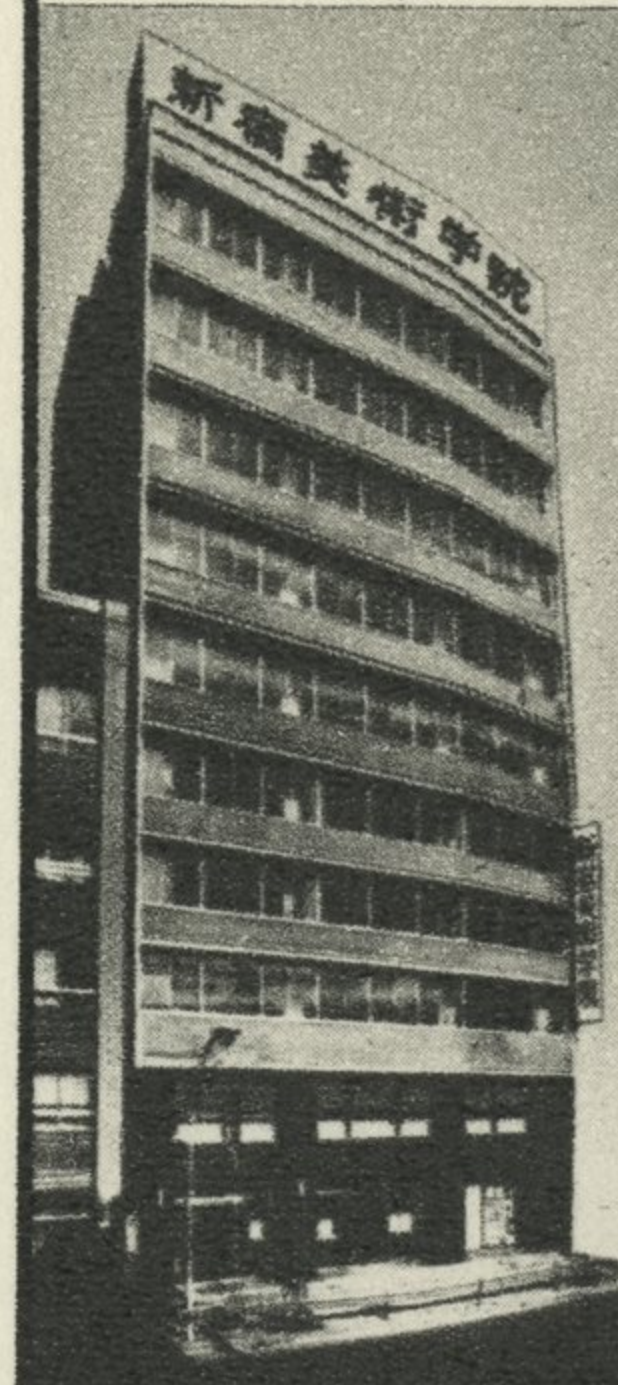
◇冷暖房完備

油絵・デザイン 日本画・クロッキー

◇案内書無料◇郵送可

東京都新宿区新宿2-7-160地下鉄新宿御苑前下車

TEL 356-0811-0826(代)



編集後記

プロ編集が片づいてしまうと、終わったという安心感と、もう少し動いていけば、と、多少の後悔。今年は編集スタッフが少なく、個人の仕事が多過ぎて、細部にまで神経が行きとどかず、納得できるようなものが出来なかったのが心残りだ。来年は、質的にも、デザインの的にも、より充実したものが出来るよう期待したい。

夏の暑い中、広告取りに歩いて下さった方々、原稿を寄せて下さった皆様、それから、夏休みを原稿集めで棒にふってくれた野沢君に感謝します。

邑田

プログラム編集責任者 邑田昇一

協力 野沢憲二

印刷 光村原色版印刷所

3779
916
16

パーフェクト その真の意味を語るピアノ New Series



フルコンサート

KG-8

現金正価 1,500,000円

セミコンサート

KG-6

現金正価 830,000円

KG-5

現金正価 630,000円

KG-3

現金正価 500,000円

KG-2

現金正価 400,000円

KG-1

現金正価 350,000円

13,000余に及ぶ部品のひとつひとつに
パーフェクトを求めることからスタートしたピアノ
難曲に挑むときこそ その真価を実感していただけるでしょう。

KAWAI GRAND PIANO